

# 平安京右京内5遺跡

平安京跡研究調査報告

第23輯

財團法人 古代學協會

京都

平成21年

## 序

(財)古代學協会は昭和32年に平安宮の勤学院跡の発掘調査を実施して以来、平安京の左京内での発掘調査研究が多く、平成12年に初めて右京六条三坊にあたる島津製作所五条工場跡地で大規模な発掘調査を実施する機会に恵まれた。今回刊行することとなったこの報告書は、昭和63年に古代學研究所を設立して以来、平安京内で発掘調査した右京内で、先の島津製作所を除く5ヶ所の調査である。

従来、平安京の右京は殆ど衰退して左京のみが繁栄していたような印象があったが、近年の考古学研究によって、平安時代後期になっても道路や条坊など都市的な状況の中で、有力貴族たちが生活していた実態が文献や出土遺物から明らかになってきている。本報告書に記載された唐三彩の虎頭枕や石帶などの出土遺物はそれを物語っているし、また文献に見える從八位上三善宿禰弟正と從七位上紳の住居とも想定される遺構があり、さらに右京六条四坊七町では市街地の中にあって弥生時代の大集落である西京極遺跡であると同時に、今日でも所在不明の葛野郡衙の推定地でもあり、平安京が造営される以前からの地域として、今後の右京の研究に益するものが大きいと思われる。

発掘調査期間中には関係各位からご尽力を賜りながら、報告書の刊行に際して長期にわたって遅れたことをお詫びいたします。

平成21年3月

財團法人 古代學協会

理事長 大坪 孝雄

## 例　　言

- 1 本書は（財）古代學協會・古代學研究所が受託した埋蔵文化財の発掘報告書である。
- 2 平成9年（1997）から平成17年（2005）までの9年間に受託した発掘調査のうち、平安京右京内の5遺跡を収録した。
- 3 調査は堀内明博が担当し、坂本範基を調査員として実施した。
- 4 使用した地図は京都市発行の都市計画基本図（縮尺1:2,500）を参考にして作成した。
- 5 調査担当者が転出した後、江谷寛が纏集して作成した

## 目 次

### 平安京右京内5遺跡

平安京右京三条二坊十四町跡 .....	1
島津メディカルプラザ新築工事に伴う発掘調査	
例言 .....	
1 調査概要 .....	2
(1) 調査概要 .....	3
(2) 特記事項 .....	3
2 遺構 .....	6
遺構の概要 .....	6
(1) 平安時代 .....	6
(2) 近世 .....	8
3 遺物 .....	9
出土遺物の概要 .....	9
4 まとめ .....	10
報告書抄録 .....	15

### 図版目次

図版1	1 調査前風景 (北から)
	2 調査地全景 (北から)
図版2	1 建物1 (東から)
	2 建物1柱穴断面 (東から)

### 挿図目次

第1図	平安京条坊の調査地点 .....	3
第2図	調査位置図 .....	4
第3図	周辺の調査地 .....	5
第4図	基本土層図 .....	6
第5図	遺構図 .....	7
第6図	出土遺物 .....	9

# 平安京右京三条三坊九町跡 ..... 17

## 島津本社内新築工事に伴う発掘調査

例言 .....	18
1 調査概要 .....	19
(1) 調査概要 .....	19
(2) 特記事項 .....	19
2 遺構 .....	22
遺構の概要 .....	22
(1) 古墳時代 .....	22
(2) 平安時代 .....	22
(3) 近世 .....	28
3 遺物 .....	29
4 まとめ .....	35
報告書抄録 .....	42

## 図版目次

図版1	1 調査前風景
	2 中近世遺構面（北から）
図版2	1 SB1（北から）
	2 SB2（北から）
図版3	1 SK321（北から）
	2 SE322（南から）

## 挿図目次

第1図	平安京三条の調査地点 .....	19
第2図	調査位置図 .....	20
第3図	基本土層図 .....	20
第4図	遺構概略図 .....	21
第5図	中近世遺構概略図 .....	23
第6図	遺構全体図 .....	24
第7図	建物1 平面図・断面図 .....	25
第8図	建物2 平面図・断面図 .....	26
第9図	SK320・SH350平面図・断面図 .....	27
第10図	SE322 平面図・断面図 .....	28
第11図	SK321出土遺物（1） .....	30
第12図	SK321出土遺物（2） .....	31
第13図	SD200・230・302 SK250・320出土遺物 .....	32

第14図 SD302 SE322出土遺物	33
第15図 SK360 SH350出土遺物	33
第16図 金糸製品 石製品	34
第17図 三彩獅子頭	34
第18図 瓦	35

## 平安京右京四条二坊八町跡 ..... 43

両洋学園内新築工事に伴う発掘調査

例言	44
1 調査概要	45
(1) 調査概要	45
(2) 特記事項	45
2 遺構	48
遺構の概要	48
(1) 平安時代以前	48
(2) 平安時代前期～中期	48
(3) 江戸時代後期	55
3 遺物	55
4 まとめ	58
報告書抄録	65

## 図版目次

図版1	1 調査前風景（南から）
	2 調査区全景（北から）
図版2	1 SE7（東南から）
	2 SK228・SK229（東から）

## 挿図目次

第1図 平安京三条坊の調査地点	45
第2図 調査位置図	46
第3図 周辺の調査地	47
第4図 基本土層図	48
第5図 遺構図	49
第6図 三条大路築地平面図・断面図	50
第7図 SB1・SB4 平面図・断面図	51
第8図 SB3・SB6 SB7・SB8 平面図・断面図	52

第9図 SE7 平面図・断面図・土層図 .....	53
第10図 SE7 曲物 .....	53
第11図 出土遺物（1） .....	56
第12図 出土遺物（2） .....	57
第13図 鉄轍 .....	58
史料 .....	60
報告書抄録 .....	65

## 平安京右京六条四坊七町跡 ..... 67

西院月双町 マンション新築工事に伴う発掘調査

例言 68	
1 調査概要 .....	69
(1) 調査概要 .....	69
(2) 特記事項 .....	69
2 遺構 .....	72
遺構の概要 .....	72
(1) 基本層序 .....	72
(2) 平安時代から近世 .....	72
(3) 弥生時代から平安時代以前 .....	72
3 遺物 .....	76
4 まとめ .....	81
報告書抄録 .....	91

## 図版目次

図版1 1 調査地周辺の航空写真（1987年撮影）	
図版2 1 調査前風景（東から）	
2 調査区全景（北から）	
図版3 1 調査区第1トレンチ全景（北から）	
2 調査区第2トレンチ近景（西から）	
図版4 1 調査区第3トレンチ全景（真上から）	
2 調査区第3トレンチ全景（北から）	
図版5 1 SH2（西から）	
2 SD350断面（南西から）	
図版6 1 SK1160遺物出土状況近景（北西から）	
2 第1トレンチ P1127出土状況（西南から）	

## 挿図目次

第 1 図 平安京条坊の調査地点 .....	69
第 2 図 調査位置図 .....	70
第 3 図 調査区配置図 .....	71
第 4 図 遺構図 (平安時代から近世) .....	73
第 5 図 遺構図 (弥生時代～平安時代以前) .....	74
第 6 図 出土遺物 (1) .....	77
第 7 図 出土遺物 (2) .....	78
第 8 図 出土遺物 (3) .....	79
第 9 図 出土遺物 (4) .....	80
第 10 図 出土遺物 (5) .....	81

平安京右京七条二坊十一町跡 .....	93
---------------------	----

西大路七条 マンション新築工事に伴う発掘調査

例言 94	
1 調査概要 .....	95
(1) 調査概要 .....	95
(2) 特記事項 .....	95
2 遺 構 .....	98
遺構の概要 .....	98
(1) 平安時代から近世 .....	98
(2) 平安時代以前 .....	98
3 遺 物 .....	100
4 ま と め .....	100
報告書抄録 .....	106

## 図版目次

図版1	1 調査前風景 (西から) 2 調査地全景 (東から)
図版2	1 調査区全景 (西から) 2 調査区全景 (真上 南から)
図版3	1 調査区東端 (真上 北から) 2 SK70 (南西から)
図版4	1 旧河川 (西から) 2 調査区西側壁面 (北東より)

## 挿図目次

第1図 平安京条坊の調査地点 .....	95
第2図 調査位置図 .....	96
第3図 平安京の調査地 .....	97
第4図 遺構図 .....	99

# 平安京右京三条二坊十四町跡

島津メディカルプラザ新築工事に伴う発掘調査

## 例　　言

1 遺跡名	平安京跡（平安京右京三条二坊十四町）
2 調査所在地	京都市中京区西ノ京下会町11
3 委託者	株式会社 烏津製作所
4 調査期間	平成14年（2002）10月2日～11月9日
5 調査面積	約495m <sup>2</sup>
6 契約番号	略記号：02HK-U4
7 調査担当者	堀内明博
8 実勤日数	37日
9 延べ人数	補助員 95人　作業員 2165人

## 1 調査概要

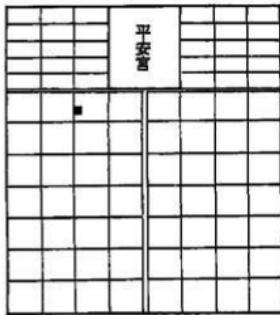
### 1 調査概要

調査地は、京都の市街地の北西、西大路御池交差点の南西、市立西京商業高校の南向いに位置する。標高は約33.5mである。当地は平安京の右京三条坊門小路の南、野寺小路と道祖大路の間に位置し、条坊では三条二坊十四町の北東にあり、東二行北二門から北四門に相当する。

これまでの付近の調査事例は、1989年（平成元年）に平安京右京三条二坊十四町の北東隅の野寺小路とその東の十一町の一部、1998年（平成10年）には同じく十四町の北西隅が財団法人京都市埋蔵文化財研究所によっておこなわれ、平安時代前期から中期の掘立柱建物や塀などの区画施設が確認されている。

これらの既往の調査から8分の1町あるいは4分の1町程度の宅地規模が想定され、関連する掘立柱建物、横列など宅地のありかたを知る遺構の存在が予想された。

調査の結果、平安時代、近世・近代にかけての遺構・遺物を確認した。

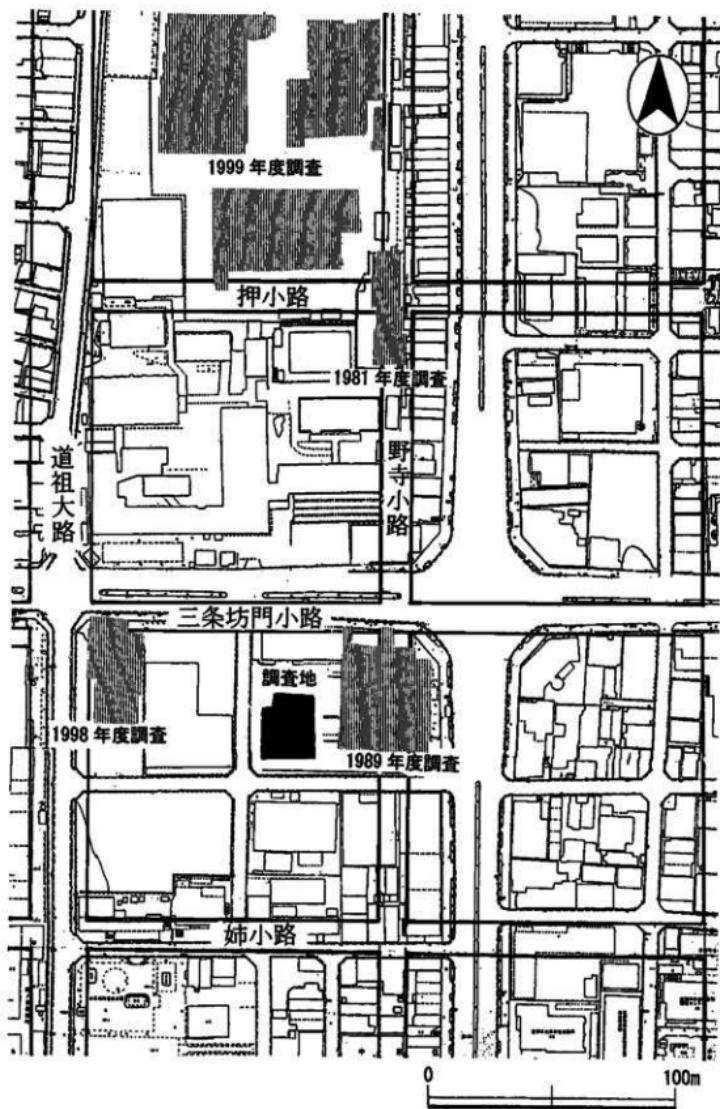


第1図 平安京条坊の調査地点

### 2 特記事項

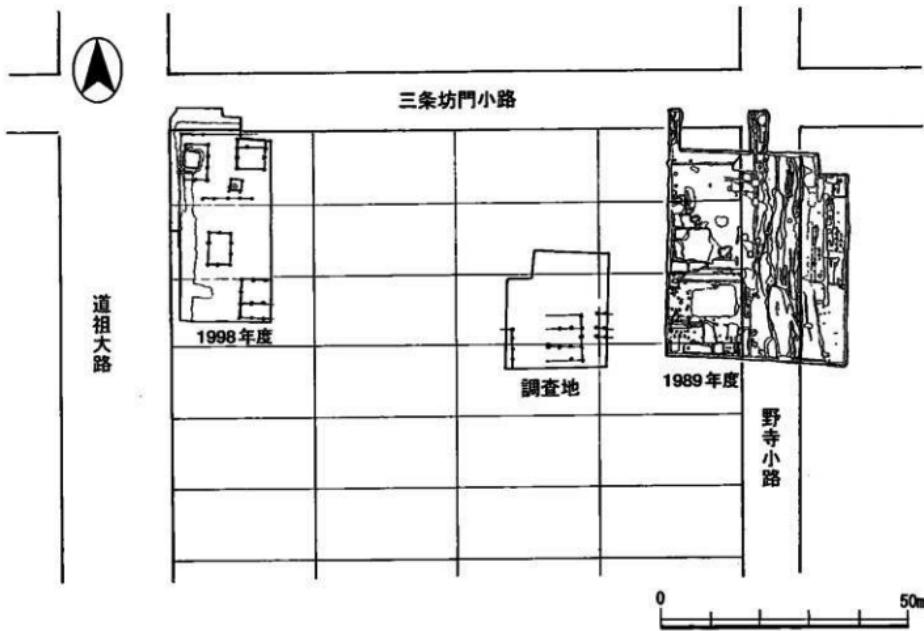
調査の結果、江戸時代の土取り跡とみられる比較的大きな土壙が調査区の半分以上を占めた。深さは、深い所で1m近くを測るために、それ以前の遺構はこれにより多くが破壊されていると考えられる。

それらの分布状況をみると、調査区の西端と北端に土取り穴が広がり、東部には近世耕作溝が検出された。また、調査区南部において、西側は近世の土取りにより削平されている所が多いが平安前期の建物跡が確認できた。その中でも中央部で南北庇付きの建物が確認されたことから、中心的な施設と考えられ、宅地のあり方を考える上で重要な手がかりがえられた。



第2図 調査位置図

第3図 周辺の調査地



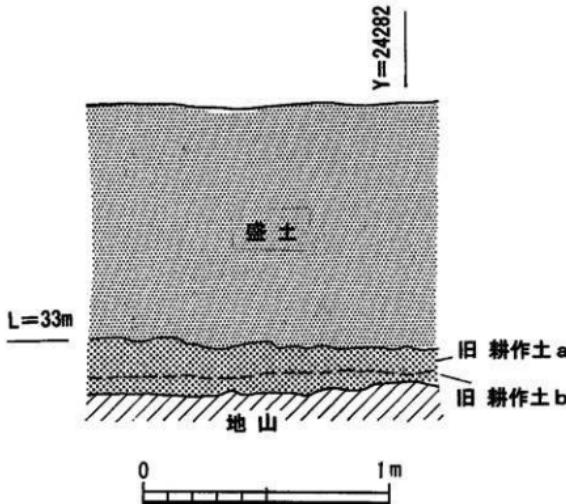
## 2 遺構

時代	遺構	備考
近世・近代	土取り穴、南北・東西小溝	
平安時代前期～	建物跡	

### 遺構の概要

本調査により確認された遺構総数は58基数え、平安時代から近代まで至る。これらは継続するものではなく、平安時代、近世・近代の3時期に大別され、それぞれ性格の異なる遺構であることが判明した。以下に主要な遺構について概観する。

調査地の基本土層は、現地表面より約0.9m、トレーンチ南西の深いところで約1.6mが現代の盛土層（レキ層）で、次いで厚さ10~40cmが旧耕作土層（a：褐灰色砂泥層10YR5/1、b：灰黃褐色砂泥層10YR5/2）、その下に地山（明黃褐色砂泥層10YR6/6）が存在する。



第4図 基本土層図

### 1 平安時代

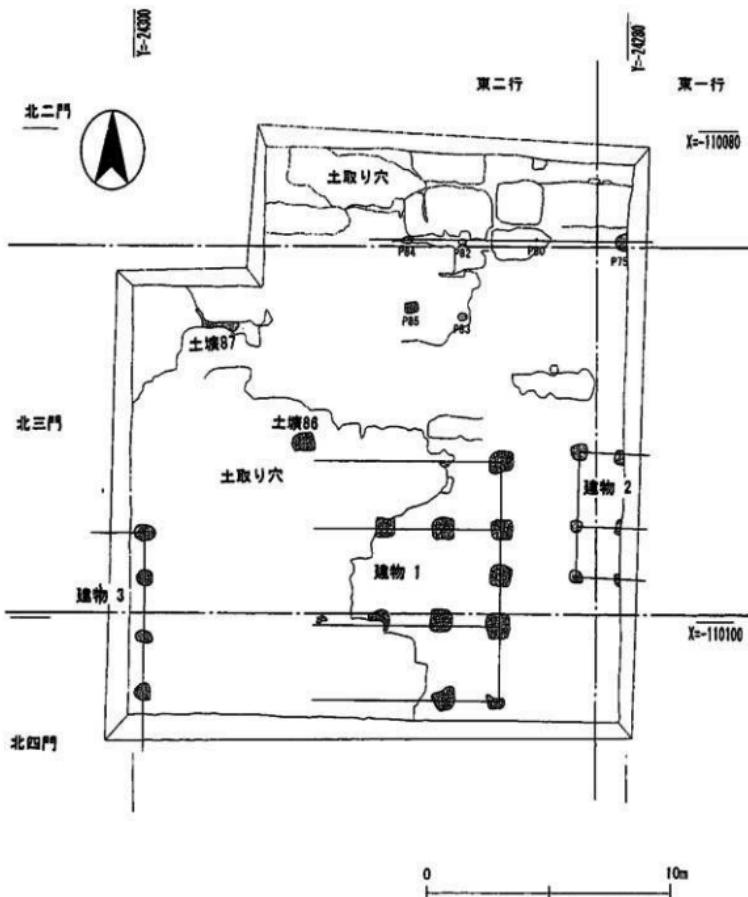
平安京右京三条二坊十四町に相当する。調査により、建物跡3棟（建物1、建物2、建物3）を確認した。

建物1は、東二門の北三門と北四門に位置し、桁行4間（柱間約8尺）以上、梁行2間（柱間約6尺6寸）で南北に庇が付く。北庇は柱間約9尺、南庇は柱間10尺でおそらく桁行5間の東西棟と推測されるが、西半分は土取りにより削り取られているため認定できない。柱穴の規模は、柱掘形約80cmを測り方形を呈するが、柱穴上層部

を近世の土取りにより削平されているため10~25cm程しかとどめていなかった。

建物2は、トレンチの南東に確認された桁行1間（柱間6尺）以上、梁行2間（北列柱間約9~10尺、南列柱間約7~8尺）を測る。柱穴の規模は、柱掘形約60cmを測り方形を呈するが、柱穴上層部が削平されているため、10~25cm程の深さでしかとどめていなかった。建物1と建物3がほとんど正方位に建つに対して、わずかではあるが建物2は北に対して1°程東に傾いている。この建物はさらに東側調査区外へと続く。

建物3は、調査区南西隅で建物の東側柱に想定される桁行3間（柱間6~8尺）の南北柱列である。柱穴の規模は、柱掘形約60cmを測り方形を呈するが、建物1と同様に上層部を近世の土取りにより削平されているため、北側柱列で約10cm、南側柱列では約30cmの深さで確認した。樋列とも考えられるが、柱穴列から西へ、東二行と



第5図 遺構図

東三行の境界まで約10cmの間隔があり、これら4つの柱穴を東側柱とする南北棟の建物を想定した。

以上3つの建物を確認したが、建物1と建物2、建物3の間はほぼ同距離を測る。そして建物1は、その規模や形態から、建物2と建物3の中心的位置にあった可能性が考えられる。

調査区北部に、土取りの肩や下層にわずかに残る柱穴と思われる遺構6基（P75、P80、P82、P83、P84、P85）を確認した。P75、P80、P82、P84が四行八門の北二門と北三門の境界にあることから構または礎の可能性が考えられる。

調査区北西部には、平安時代の遺構と考えられる土壙86と土壙87を検出した。土壙86は残存掘形約80cmを測り、土壙87は東西の掘形約150cm（南北は近世の土取により削平）を測るものである。埋土は両方とも、黒褐色ないし黒色砂泥である。しかし、大半を近世の土取りによって削り取られているため、どの様な性質の遺構であるかは確認できなかった。これらの遺構からは炭化物を微量に混じり、土師器、須恵器、黒色土器等の小片が含まれていた。

## 2 近 世

調査区の半分以上の範囲で江戸時代の土取り穴を検出した。土取り層の埋土は黒色砂泥10YR2/1、褐灰色砂泥10YR4/1・25Y4/1、明黄褐色砂泥10YR7/6、明黄褐色泥土10YR6/6等である。

土取り穴は方形に掘り下がったものが多数検出されたが、その周囲には広範囲に渡りながらに掘削されたところが確認された。土取り穴の規模は、方形を量するもので掘形0.5～3m近いものまでとまちまちであり、深さは20～90cmを測る。方形に掘り下がられた土取り穴は、大小合わせて20近い数を確認した。方形の土取り穴の周囲に広がる土取り跡においては、深さは5～30cmを測るもののが検出された。

また、トレンチ東端から西へ4mの所に、南北に切り合ひながら走る溝（灰黄褐色砂泥10YR4/2）を数条検出した。溝の幅は15～30cm、深さ5～10cmを測る。調査範囲の制約があるが、それらの溝には正方位のものと北に対して東に1～2°程わずかに傾くものがある。これらの南北に走る溝に東西の溝（灰黄褐色砂泥10YR4/2）が交わる。東西溝は幅30～50cm、深さが20cm程と南北溝に比べ規模のしっかりした溝を確認した。

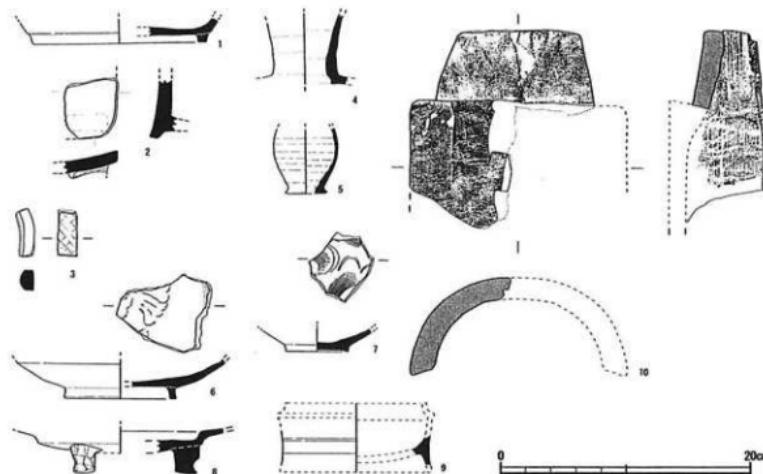
### 3 遺 物

時代	出土地	道 物	備 考
平安時代	柱 穴	土師器小片（皿・椀・壺）、須恵器（杯、壺、甕）、灰釉陶器小片（椀・壺・風字硯）、綠釉陶器小片、黒色土器小片、平瓦小片	*近世の土取り穴から出土した遺物を含む
近 世	土取り穴 耕作溝	白磁：合子の身口縁、青磁：香炉脚部（越州窯）、燒結陶器小片、瓦器鍋小片、砥石	

#### 出土遺物の概要

出土した遺物は、コンテナーに16箱である。

主に、調査区の半分以上を占める土取り穴からの出土である。土取り穴の埋土には、平安時代から近世にかけての遺物がみられた。平安時代の遺構が土取り穴により削平されていることからも、平安・中世の遺物が混入したと考えられる。特にまとまった遺物の出土ではなく、ほとんどが小片であったが、灰釉陶器風字硯脚部なども出土している。また、晚唐から五代の白磁の九緑口縁片や越州窯産の青磁香炉脚部などの輸入陶磁器も多数出土した。



第6図 出土遺物

第6図1はW21区の土取り中に出土した須恵器杯Bで、貼り付け高台。2はV21区稽査中出土の風字硯。表面大部分に自然釉がかかる。3はX23遺構検出中に出土した灰釉の把手。全面に削りを施し、上面に格子状の線刻があり、釉がかかる。4はW21区の土取り中に出土した須恵器の壺か平瓶。5はV21区掘り下げ中出土の須恵器壺Mで、作り出し高台。6はY21区土取り中出土の縁釉皿。内面に沈線があり、見込みに陰刻花文がある。7はW23区掘り下げ中出土の青白磁碗。内側彫りと片切彫りによる文様がある。平高台で底部はクロヘラ削りが見られ、貢入がある。8はY22区土取り中出土の灰釉三足盤。内面に施釉。9は遺構検出中に出土した青磁（越州窯）の香炉。全面に施釉。

#### 4 まとめ

今回の調査での成果として、平安時代前期の建物跡3棟と橋または堀などの区画施設の可能性がある遺構を検出することができた。

これらの建物跡から平安京の宅地のあり方を想定すると、建物1が十四町の東二行北三門と北四門に位置すること、橋または堀の可能性のある遺構6基が、北二門と北三門の境界に位置することから、建物1を中心とした8分の1町の宅地割りが考えられる。

## 報告書抄録

ふりがな	へいあんきょううきょうないごいせき							
書名	平安京右京内5遺跡							
副書名	平安京右京三条二坊十四町跡							
卷次								
シリーズ名	平安京跡研究調査報告							
シリーズ番号	第23編							
編著者名	江谷 寛							
編集機関	(財)古代学協会							
所在地	〒604-8131 京都府京都市中京区三条高倉				TEL 075-252-3000			
発行年月日	平成21年3月31日							
ふりがな 所収遺蹟	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
へいあんきょ ううきょうさ んじょうさん ぼうじゅうよ んちょうあと 平安京右京 三条三坊十四 町跡	きょうとしなか ぎょうくにしの きょうしもあい ちょう 京都市中京区西 ノ京下会町11	26100	遺蹟番号	35° 00' 27"	135° 44' 02"	2002年 10月2日 ~11月9 日	49.5m <sup>2</sup>	建物建築 工事
所収遺蹟名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京右京 三条三坊十四 町跡	都城跡	平安時代	建物跡	土師器(皿・碗・壺) 須恵器(杯・盞・甕) 灰釉陶器 (碗・壺・風字硯) 綠釉陶器 黑色土器 平瓦	近世の土 取り穴か ら出土し た遺物を 含む			
			近世・近代	土取り穴、南北・東西小溝	白磁(合子の身口縁) 青磁(香炉脚部) 焼締陶器 瓦器鍋 砥石			

# 図版



1 調査前風景（北から）



2 調査地全景（北から）



1 建物1（東から）



2 建物1柱穴断面（東から）

# 平安京右京三条三坊九町跡

島津本社内新築工事に伴う発掘調査

## 例　　言

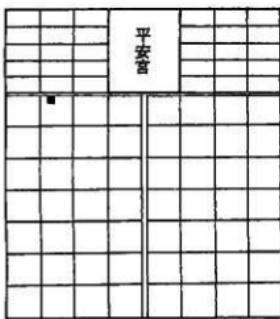
1 遺跡名	平安京跡（平安京右京三条三坊九町）
2 調査所在地	京都市中京区西ノ京徳大寺町1番地
3 委託者	株式会社 島津製作所
4 調査期間	平成15年（2003）10月27日～12月21日
5 調査面積	約715m <sup>2</sup>
6 契約番号	略記号：02HK-U5
7 調査担当者	堀内明博
8 実勤日数	47日
9 延べ人数	補助員 31人　作業員 494人

## 1 調査概要

### 1 調査概要

本調査地は、京都市中京区西ノ京德大寺町にあり、東を佐井通、西を西小路通、南を御池通、北を紙屋川に限られた株式会社島津製作所本社跡地のほぼ中央に立地する。平安京の条坊では右京三条三坊九町に相当し、平安京の北西、平安宮の南西隅から西方に位置する。また、周辺での既往調査例は、試掘・立会調査を含めると島津製作所本社内において23件あり、平安京の宅地に間わる建物や構などが数多く確認されている。そのなかで当地の南側にあたる十町では、平安時代の掘立柱建物9棟、橋2条、門1棟、溝4条、墓1基、土壙2基、湿地などを確認している。このことから当地にもそれに間わる遺構群の存在が予想された。また、当地は右京三条三坊九町の南東隅に当たり、西側の十四町から十六町には『拾芥抄』所収の西京図によると、「藤原顯季所領」と記載されている。藤原顯季は、12世紀前半六条修理大夫であったことが知られ、それに間わる施設があったことが予想される。のことから当地にもそれに間連する遺構の存在も予想された。

調査の結果、平安時代を中心に、古墳時代から近代にかけての遺構・遺物を確認した。



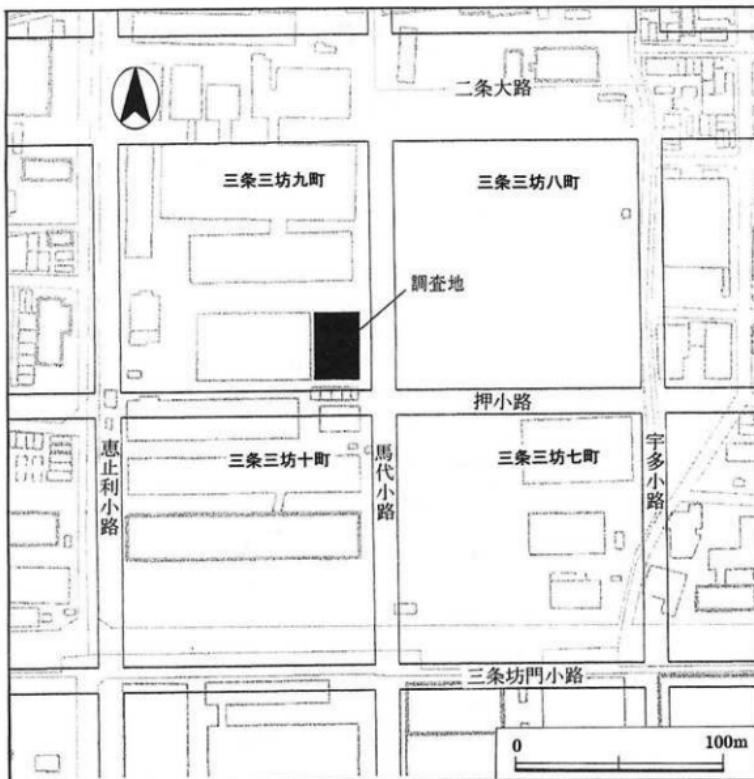
第1図 平安京条坊の調査地点

### 2 特記事項

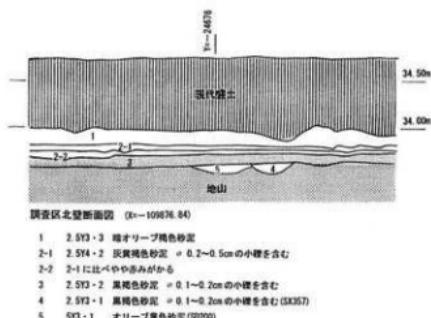
本調査区の南西には、南北と東西に庇を持つ建物（おそらく西側にも庇をもつと考えられる）があり、中心となる建物の可能性がある。さらに北東では、東西と南側に庇を持つ建物を確認し、既往調査で確認されている建物等とあわせて宅地内のあり方を考える上で貴重な手がかりをえた。

この四面庇建物の西側には井戸・土壙などがあり、平安時代前期の遺物が一括出土する。特に井戸は、2時期の変遷をたどることが明らかとなった。

なお、南西の建物域には古墳時代から平安京造営直前にかけ機能した南北方向の流路を確認し、造営時には低湿地化していたことも判明した。また、流路の東肩寄りに古墳時代の堅穴住居も確認し、この部分の土地利用を考える上でも重要な手がかりをえた。



第2図 調査位置図



第3図 基本土層図

## 2 遺構

遺構総数：358

時代	遺構	備考
中世～近代	溝	
平安時代	建物、土塙、井戸、溝	
古墳時代	堅穴住居、土塙、旧河川	

### 遺構の概要

本調査により確認された遺構総数は358基を数え、古墳時代から近代まで至る。これらは継続するものではなく、古墳時代、平安時代、中世～近代の3時期に大別され、それぞれ性格の異なる遺構であることが判明した。以下に主要な遺構について概観する。

調査地の基本土層は、現地表面より約1mが現代の盛土層（疊層）で、次いで厚さ10～40cmの旧耕作土層（1：暗オリーブ褐色砂泥層2.5Y3/3、2：灰黄褐色砂泥層2.5Y4/2、3：黒褐色砂泥2.5Y3/2）、その下が古墳時代から中世～近代の遺構を確認した地山（明黄褐色砂泥層10YR6/6）となる。この層の下部に始良火山灰層と考えられる灰白色シルト層を部分的に確認した。

### 1 古墳時代

堅穴住居1棟、土塙1基、流路1条を確認した。

堅穴住居1（SH350）は、調査区の中央にあり、長辺475cm、短辺375cm、深さ10cmを測る。周壁溝の存在については不明瞭であった。周壁沿いで土師器の甕、須恵器の甕が出土した。

土塙1（SK360）は、調査区の西端で確認した流路1の東肩部分にあり、幅は200cm以上、深さ60cmを測る。ここからは、主に土師器が出土し、須恵器、石製双孔円板も出土した。

旧河川は調査区の西端を南北方向に流れ、平安京造営直前まで存在し、それ以後は窪地として低湿地化した。また、この下層でさらに古い時期の流路を確認した。

### 2 平安時代

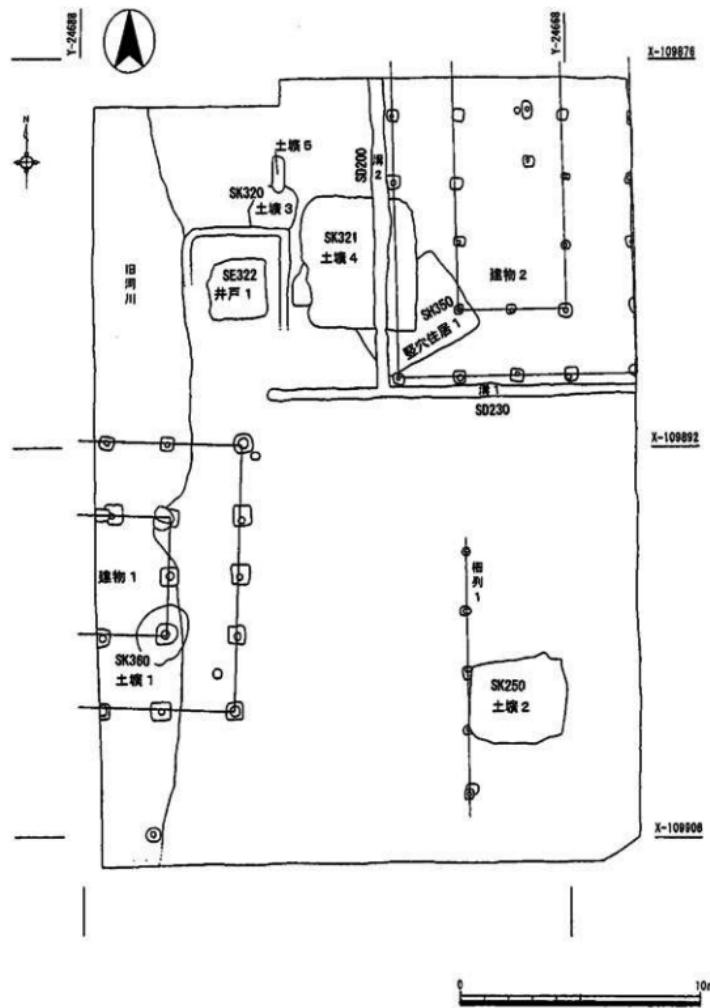
当地は平安京右京三条三坊九町の南東部に相当し、調査により建物2棟（建物1・建物2）、欄列1条、土塙4基（土塙2～5）、井戸1基、溝2条（溝1・溝2）を確認した。

建物1は、調査区の南西にあり、桁行1間（柱間約8尺）以上、梁行2間（柱間約8尺）で南北と東側に庇が付く。庇の出は約10尺で東西棟と推測されるが、西半分は調査区外に伸びるため確定できない。柱穴の規模は、柱掘形一辺50～80cmの方形を呈し、深さ30～40cmを測る。なお、身舎北側柱列には一部重複がみられる。

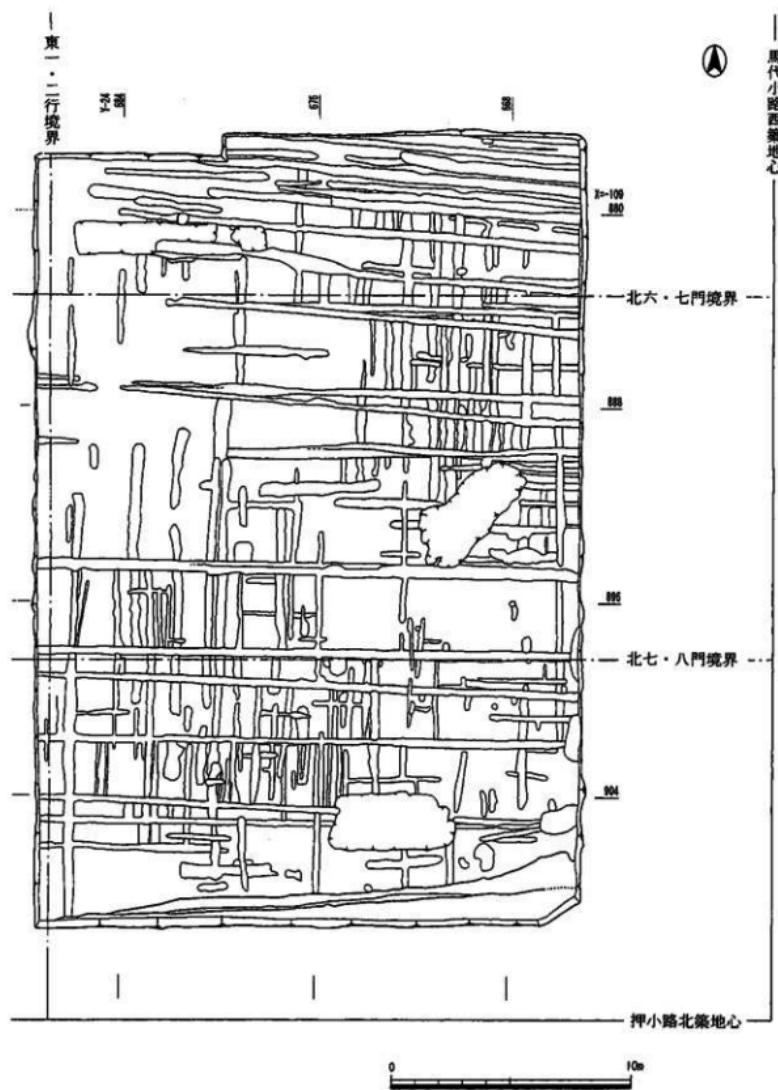
建物2は、調査区の北東にあり、桁行2間（柱間は約8尺等間）、梁行3間（柱間は8～10尺）以上で東西と南側に庇が付く。庇の出は約8～9尺で南北棟である。柱穴の規模は、柱掘形一辺40～60cmの方形を呈し、深さ20～30cmを測る。

欄列1は調査区の南東で確認した。4間以上の南北方向の欄列である。柱穴の規模は、柱掘形一辺30～40cmの方形もしくは長方形を呈し、深さ20～30cmを測る。

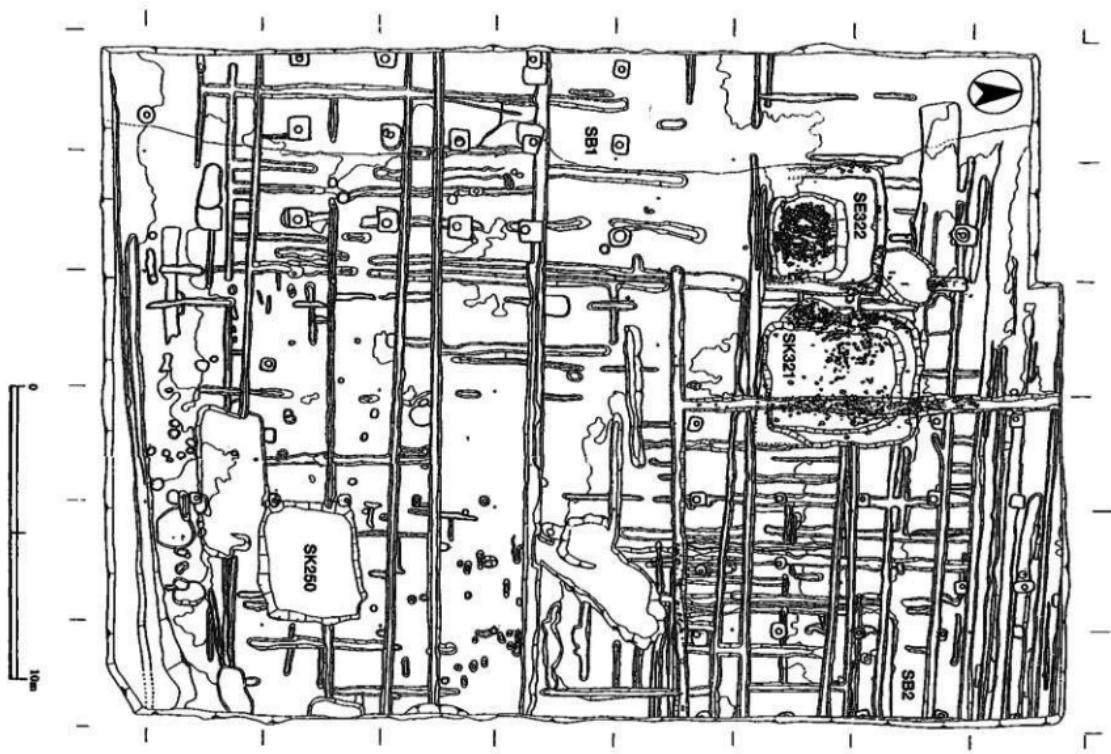
土塙2（SK250）は調査区の南東にあり、欄列1の柱穴（P263、264）を切る。南北340cm、東西400cmを測る長



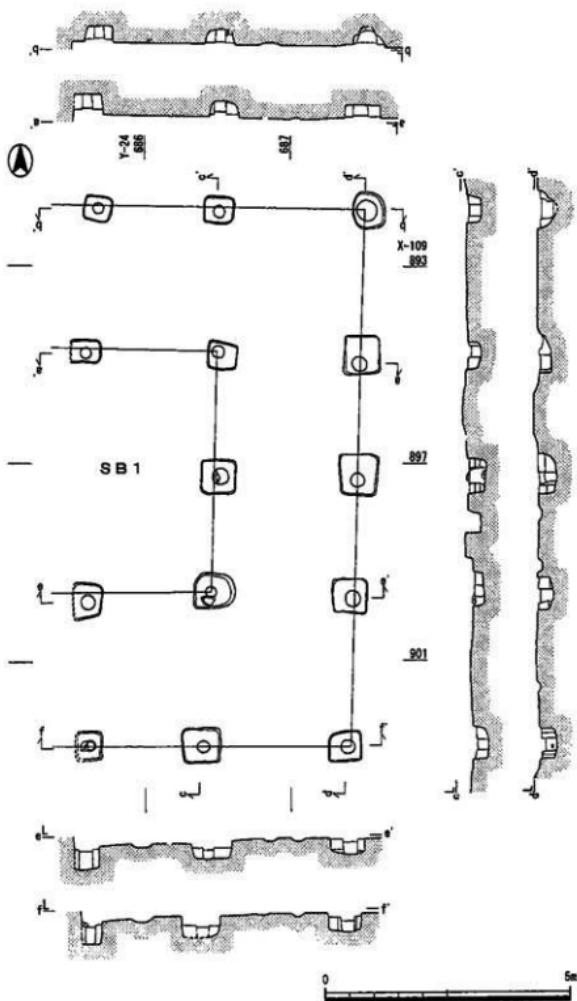
第4図 造標概略図 (1/200)



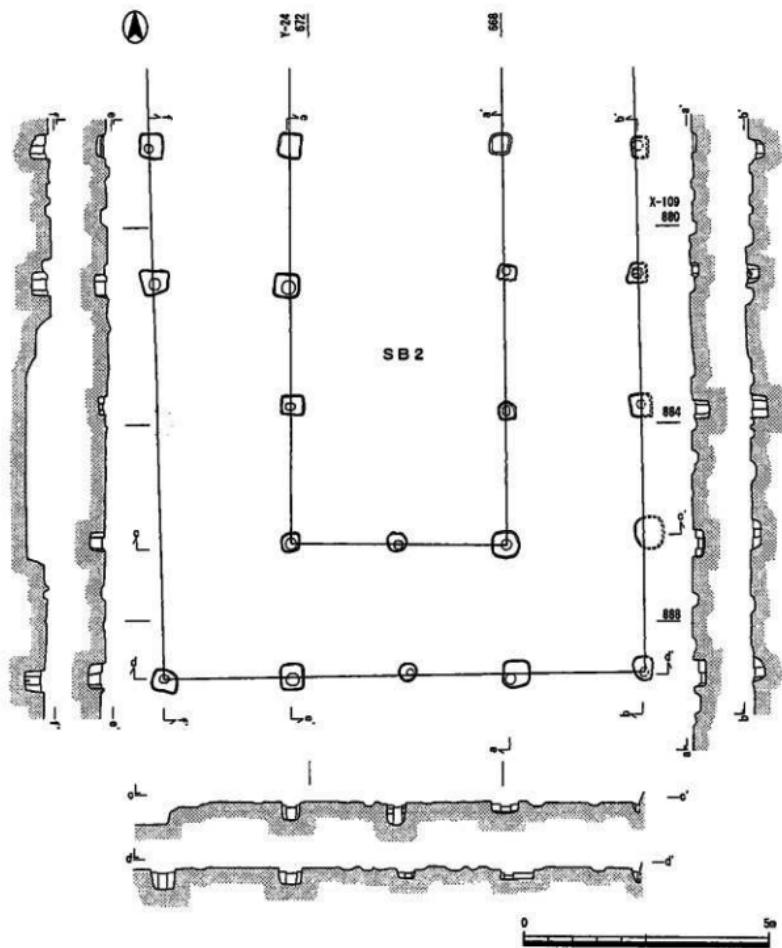
第5図 中近世造構概略図



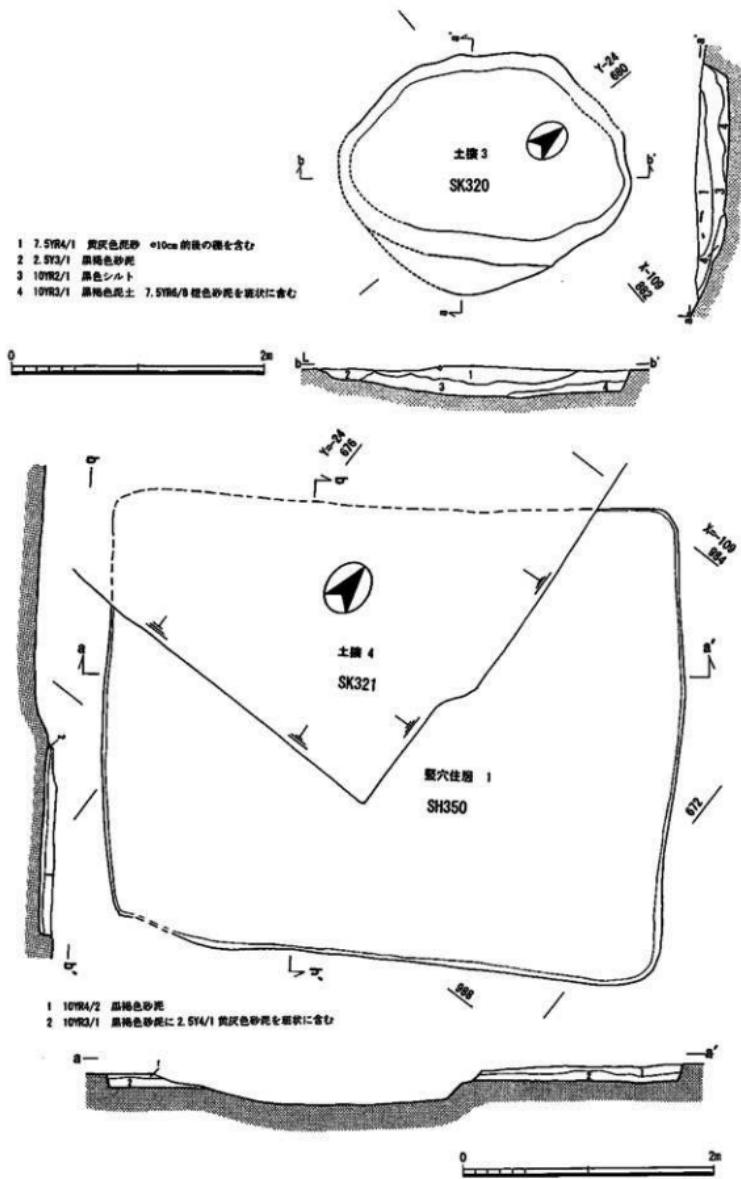
第6図 造橋全体図



第7図 建物1 平面図・断面図



第8図 建物2 平面図・断面図



第9図 SK320・SH350 平面図・断面図

方形を呈し、深さ30cmを測る。

土壤3 (SK320) は調査区の北西にあり、長軸260cm、短軸200cmの楕円形を呈し、深さ25cmを測る。

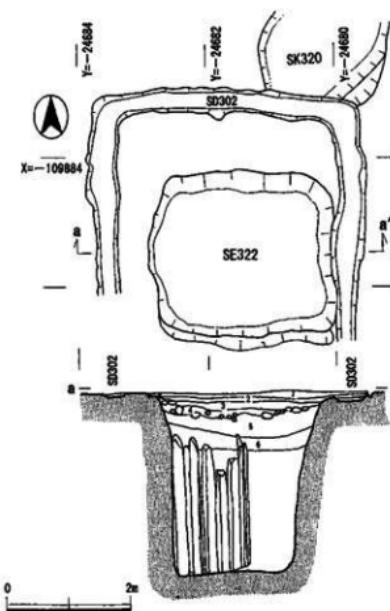
土壤4 (SK321) は調査区の北中央にあり、南北540cm、東西460cmの方形を呈し、深さ25~30cmを測る。

土壤5 (SK240) は土壤3の北側を切る。東西50cm、南北150cmの楕円形を呈し、深さ5~10cmを測る。

井戸1 (SE322) は調査区の北西にあり、南北260cm、東西260cmの方形を呈し、深さ260cmを測る。また、東・西・北で幅30~40cm、深さ5~10cmの溝を確認し、それは井戸の四周を巡り、排水用と考えられる。この上層と下層では使用方法が異なることが判明した。まず、深さ10~30cmのところで拳大から人頭大の河原石が鋤鉢状に敷き詰められ、その下には同様の河原石が約60cmの厚さで堆積する。さらにその下には、円形もしくは楕円形を呈すると考えられる立て板組の井戸枠を確認した。この井戸枠は、掘形の北西部に寄りかかるように、南半分だけとどめるところから、廃棄時に一部解体されたあと、河原石が投入され、その上にも敷き詰めて水溜として使用されたと考えられる。

溝1 (SD230) は調査区中央にある東西方向の溝で、幅70cm、深さ10cmを測る。概ね水平。

溝2 (SD200) は調査区中央から北寄りにある南北方向の溝で、幅70cm、深さ10cmを測り、緩やかに南へ傾斜する。この南端で溝1と連結し、T字状を呈する。これらは、建物2を囲むように設置されることから、宅地を細分する溝であると考えられる。



第10図 SE322 平面図・断面図

### 3 近世

調査区の全体で南北および東西の溝を確認した。南北溝に比べ、東西溝のはうが良好に残存する。これらの多くは耕作に伴う溝と考えられる。このうち東西溝は、約3.5cm間隔で設置され、2時期存在することが判明した。また、5mもしくは2.5m間隔で設置されるものもある。この時期以外にも、部分的にさらに浅い溝が存在することも確認したが、詳細については判別できなかった。

### 3 遺 物

コンテナー数：65箱

時代	出土地	遺 物	備 考
中近世	耕作溝	瓦器、陶磁器椀	
平安時代	柱穴、溝、土塙、井戸	土師器杯・皿・高杯・壺・須恵器杯・鉢・壺・甕・平瓶、黒色土器椀・壺・綠釉陶器椀・皿・壺・白磁椀・皿・青磁・瓦・鬼瓦・土馬、中国三彩獅子頭	
古墳時代	堅穴住居、流路	土師器高杯・壺・須恵器杯・高杯・甕・甌・石製双孔円板	

#### 遺物の概要

出土した遺物は、コンテナーに65箱である。

主に、調査区の北側中央に集中する平安時代の遺構および、古墳時代の遺構からまとめて出土した。

平安時代の溝1・2、土塙4、井戸1からは灰釉陶器や綠釉陶器などが多くあり、それらを保有することのできた人物の存在をうかがわせる。

井戸1の縄層からは鬼瓦片、唐三彩と考えられる獅子頭が出土した。

第11図は6~8のみSK325出土の土師器坏で他はすべてSK321出土、1~14は土師器で供膳具としての坏。14は坏B、24は土師器高杯で面取り6分割、25は面取り7分割で脚部内面に墨書がある。26~29は土師器甕。30は黒色土器のミニチュア甕で外面に磨きをほどこす。

第12図もSK321出土遺物で、31~35は須恵器。31は坏B、32は甕で、肩部に灰がかかり、底部には1線状のヘラ記号がある。33も甕M。35・36は甕。36~43は綠釉椀、44~49は綠釉皿、50は綠釉香炉の蓋。51~54は灰釉陶器で、51・52は皿。53は内面に蓮華文のある耳皿で一部に施釉。54は蓋で、外上面に線刻文があり、施釉する。

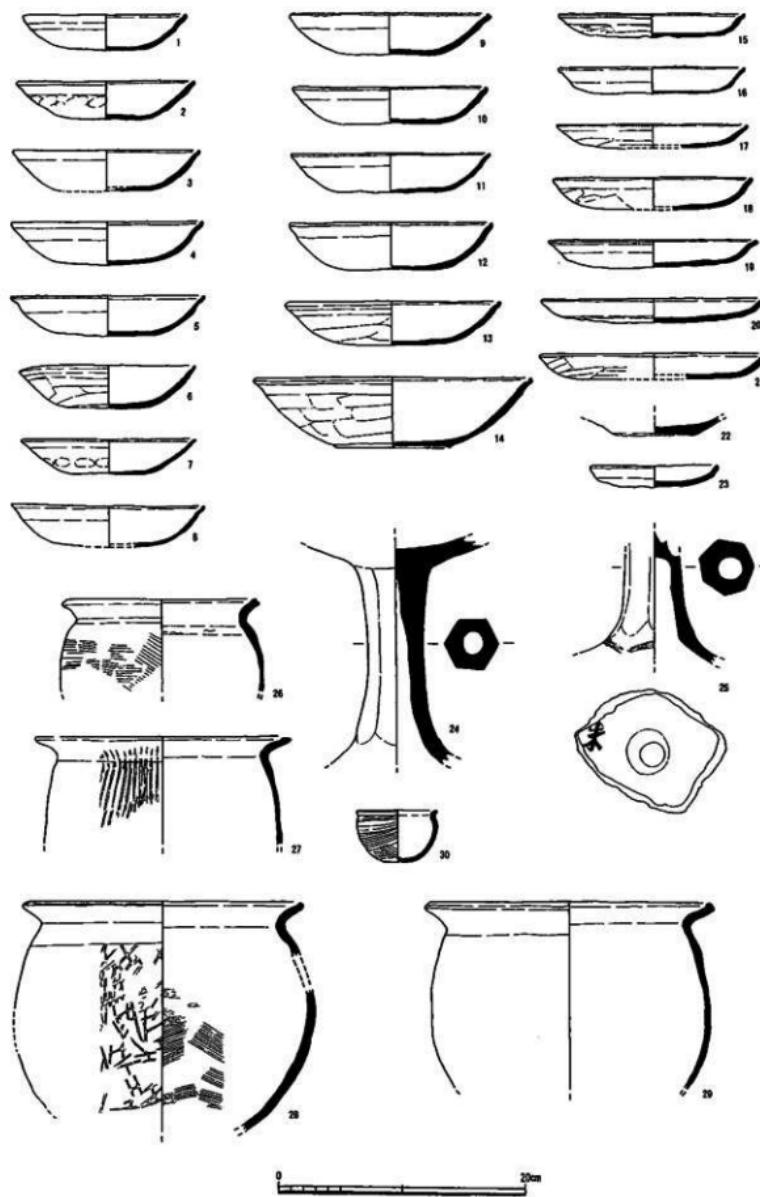
第13図55.56.61.63.65.67.68.70.71.72はSD200出土。57.58.59.62.64.66.69はSD230出土。55は土師器の坏。56~59は土師器の皿。60は須恵器の鉢。61は須恵器の蓋の口部。62は甕M。63~71は綠釉陶器の椀。64は蛇目高台貼り付け。68は輪高台貼り付けで口縁部に2ヶ所内側に凹む。69~71も輪高台貼り付け。72は灰釉陶器の皿で、底部の糸切痕を中心だけ残して撫で消す。73~77はSD250出土。73は土師器の坏。74~76は土師器甕、77は須恵器の蓋を転用した硯。上面に格子条のヘラ記号と擦痕がある。内面には墨が付いている。85.86はSD320出土。85は古墳時代の甕で火ぶくれが多く、底部にヘラ記号がある。86は須恵器の鉢Dで摩滅が著しい。

第14図78~83はSD302出土。78~80は土師器皿、81は綠釉陶器椀。82は綠釉陶器盤、83は綠釉陶器香炉の脚部。他は全てSE322出土。87は土師器皿で中央に穴がある。88が須恵器蓋M。89.90は須恵器甕、91は綠釉の素地で蛇目高台削りだし。93は綠釉陶器皿、92は灰釉陶器耳皿、94は長沙銅管窓蝶文メダリオン貼り付け文の水注と似たもの。95は白磁椀。

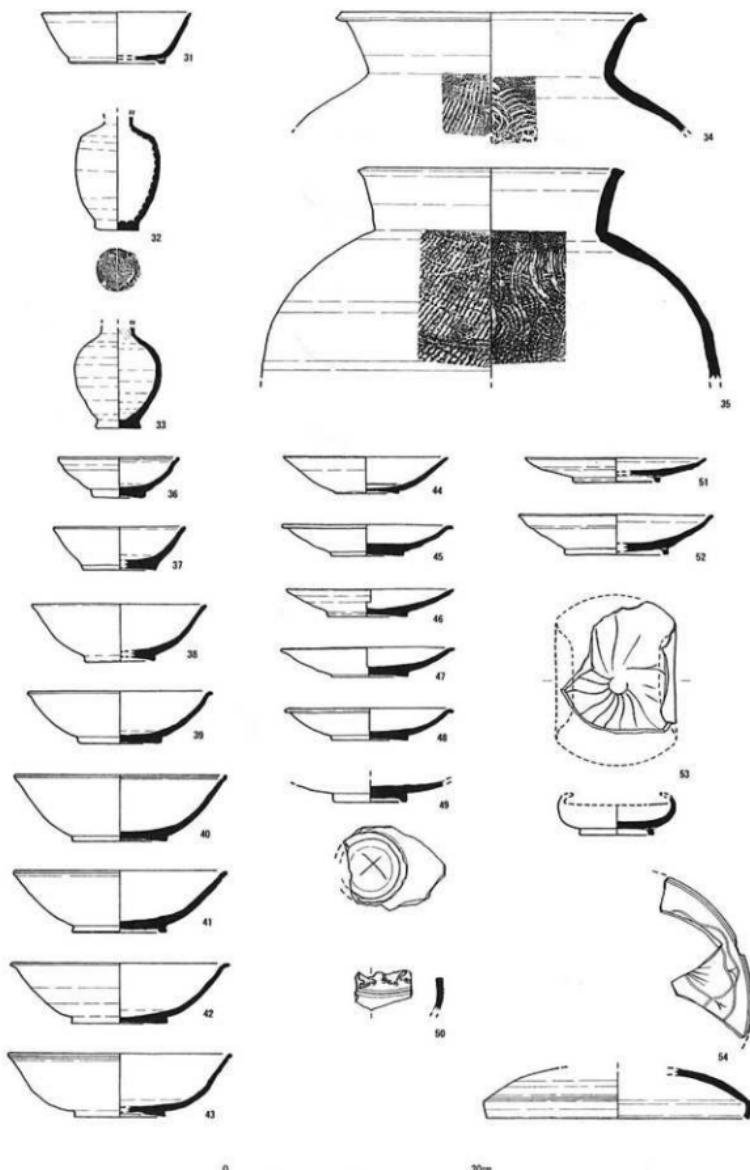
第15図98.102.103.106はSH350出土。他は全てSK360出土。96は土師器の坏。97.88.89は古墳時代の高坏。100は土師器の甕。101.102は土師器の甕。103は須恵器の蓋。104.105は須恵器の坏身。106は古墳時代の甕。

第16図はSK321出土の金属製品と石製品。107.108は鉄製品で鍛と見られる。109.110.111は銅製の蓋。112.113は石帯の丸瓶で、潜り穴が二つずつ、三ヶ所に放射状に空けられている。114は製作中のものと思われるが古墳時代の石製の双孔円板で、横一列の穴は貫通している。

第17図は115はSE322の縄層から出土した、唐三彩の虎頭枕の獅子頭。褐色釉の上から目、耳、髪の一部以外



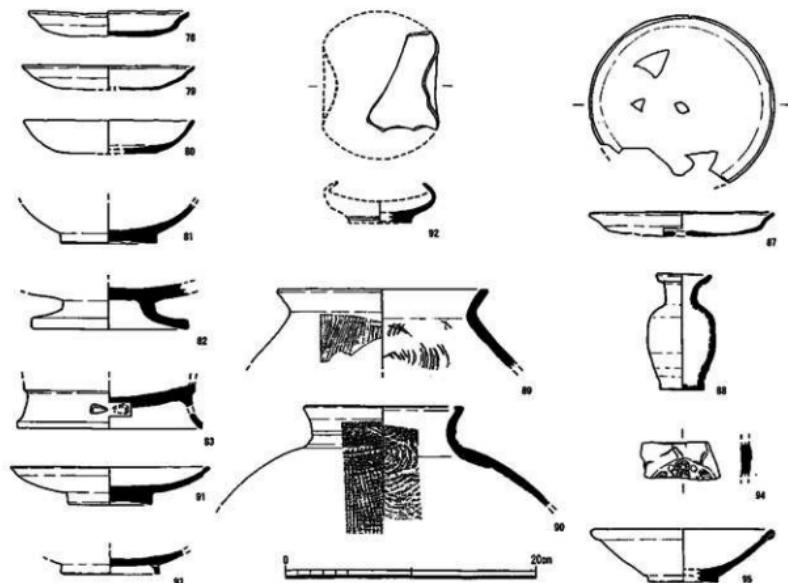
第11図 SK321・SK325出土遺物(1)



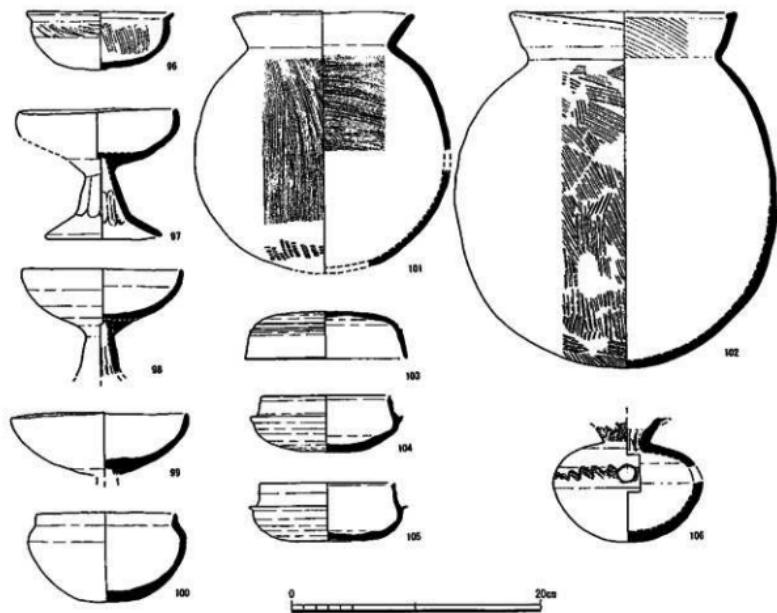
第12図 SK321出土遺物 (2)



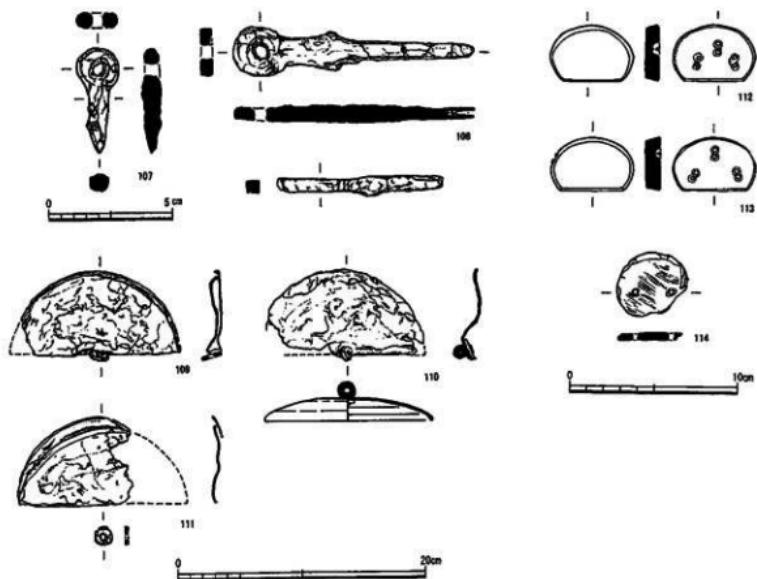
第13図 SD200・SD230・SD302 SK250・SK320出土遺物



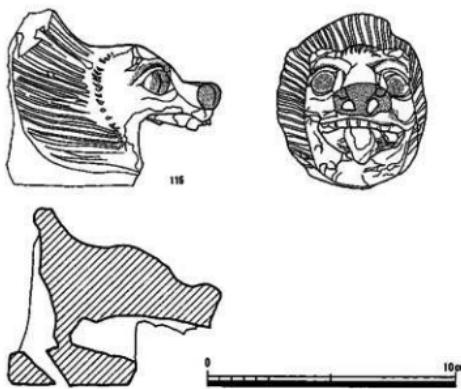
第14図 SD302 SE322出土遺物



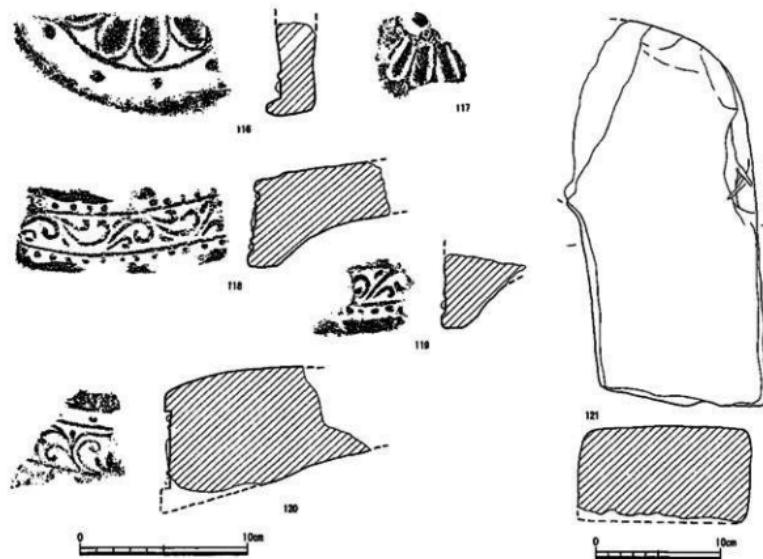
第15図 SK360 SH350出土遺物



第16図 SK321出土金属製品 石製品



第17図 SK321出土三彩獅子頭



第18図 瓦

の全体に黄釉を施す。口、鼻の内側は朱色、喉の位置に直径0.5~0.8cmの穴が通る。

第18図116は長岡京7133形式の軒丸瓦、118.119は長岡京6721形式の唐草文軒平瓦。120は従来大阪府吹田市の岸部瓦窯製品(Kb)と考えられてきたが、近年は平安宮造営のための西賀茂瓦窯のNS202形式と見られる平安時代初期の軒平瓦。121は瓦当面が剥離した鬼瓦。

#### 4 まとめ

今回の調査での成果として、平安時代の建物を2棟と井戸・土壙等を検出し、宅地利用を考えるうえで重要な手がかりをえられた。調査区の北東に存在する建物を囲むようにT字状の溝を確認したことから、宅地利用を考える上での重要なことといえよう。また、井戸や土壙などから出土した遺物は高位の人物が周囲に存在したことを裏付けるものと考えられる。

さらに、平安京造営前に、南北方向の流路が存在したことも明らかとなった。この南側で、古墳時代の土師器を主体とした土壙を確認したことと、流路が少なくとも2時期に判別できることから、古墳時代まで遡る可能性もわかった。この東側では、堅穴住居を1棟確認し、当該地域で、同時期の集落の存在を初めて明らかにできた。なお、それは一部でしかなく、古墳時代の建物の配置については今後の調査を待ちたい。

# 図 版



1 調査前風景



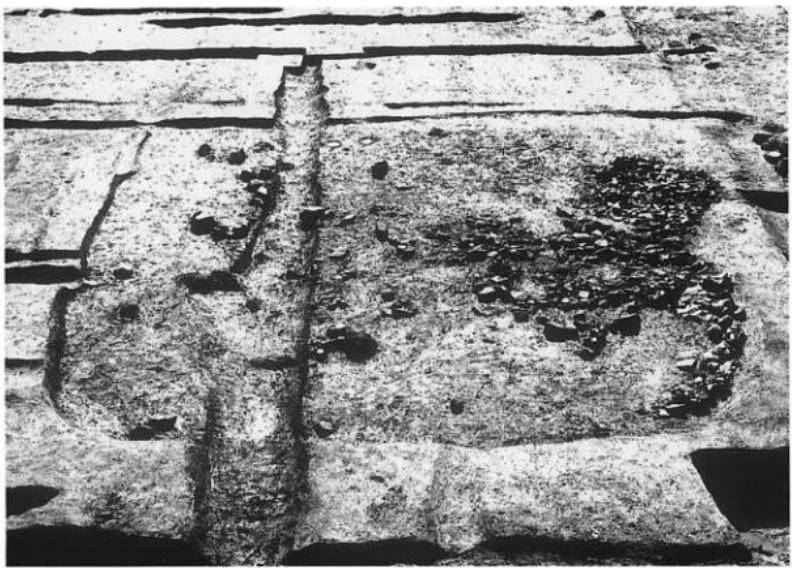
2 中近世遺構面（北から）



1 SB1 (北から)



2 SB2 (北から)



1 SK321 (北から)



2 SE322 (南から)

## 報告書抄録

ふりがな	へいあんきょううきょうないごいせき						
書名	平安京右京内5遺跡						
調査名	平安京右京三条三坊九町跡						
卷次							
シリーズ名	平安京跡研究調査報告						
シリーズ番号	第23報						
編著者名	江谷 寛						
編集機関	(財)古代学協会						
所在地	〒604-8131 京都府京都市中京区三条高倉 TEL 075-252-3000						
発行年月日	平成21年3月31日						
ふりがな 所取遺蹟	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺蹟番号	北緯 °'" 東經 °'" 調査期間 日～日 月日	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因		
へいあんきょ ううきょうさ んじょうさん ぼうきょうう ちょうあと 平安京右京三 条三坊九町跡	きょうとしなか ぎょくうにしの きょうとくだい じちょう 京都市中京区西 ノ京極大寺町1	26100	35° 00' 32" 43' 46"	135°	2003年 10月27 日～12 月21日	715m <sup>2</sup>	建物建築 工事
所取遺蹟名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
平安京右京 三条三坊九町 跡	都城跡	古墳時代	堅穴住居・土塼・旧河川	土師器壺・甕・ 須恵器高杯・甕・壺・ 石板双孔円板			
		平安時代	建物・土塼・井戸・溝	土師器壺・甕・高杯・ 甕・須恵器杯・鉢・甕・ 甕・平瓶 黒色土器・碗・甕・ 綠釉陶器碗・甕 灰釉陶器甕・甕 白磁碗・甕 青磁・瓦・鬼瓦 土馬・中国三彩虎頭枕			
		中世～近代	溝	瓦器・陶磁器碗			

# 平安京右京四条二坊八町跡

両洋学園内新築工事に伴う発掘調査

## 例　　言

- |         |                       |
|---------|-----------------------|
| 1 遺跡名   | 平安京跡（平安京右京四条二坊八町）     |
| 2 調査所在地 | 京都市中京区壬生大竹町13         |
| 3 委託者   | 学校法人 両洋学園理事長 安田伊佐男    |
| 4 調査期間  | 平成9年（1997）2月12日～5月30日 |
| 5 調査面積  | 約345m <sup>2</sup>    |
| 6 契約番号  | 略記号：96HK-U1           |
| 7 調査担当者 | 堀内明博                  |
| 8 実動日数  | 50日                   |
| 9 延べ人数  | 補助員・作業員 246人          |

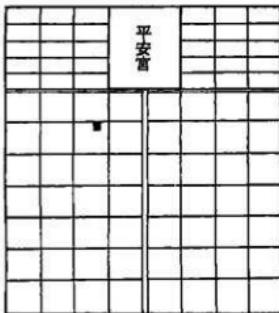
## 1 調査概要

### 1 調査概要

調査地は、平安京右京四条二坊八町にあたり、東は西朝負小路、西は堀川小路、北は三条大路、南は六角小路に囲まれた八町の北西隅に位置する。調査地周辺は、「平安遺文」弘仁八年（817）八月十一日の「山城国紀伊郡司解案」に四条二坊の戸主として從八位上三善宿禰弟正と從七位上姉の名が見える。また『続日本後記』承和三年（836）八月十四日条に河内国人左少史善世宿禰豈上が右京四条二坊に貢附されたことがしられる。更に故実叢書本「拾芥抄」西京圖によると「小泉」とされている。このような文献資料から当該地には、これらに関連する遺構群の存在が予想される。一方1986年両洋学園の本校舎新築の際発掘調査を実施したところ、平安時代前期から中期にかけての三条大路路面・築地・側溝・内溝・堀・掘立柱建物、南北溝などが確認された。

まず調査に先立ち遺跡の有無を確認するために試掘調査を実施したところ、敷地東端で数多くの柱穴が確認されたことから、当地にも何等かの遺構の存在が明かとなった。

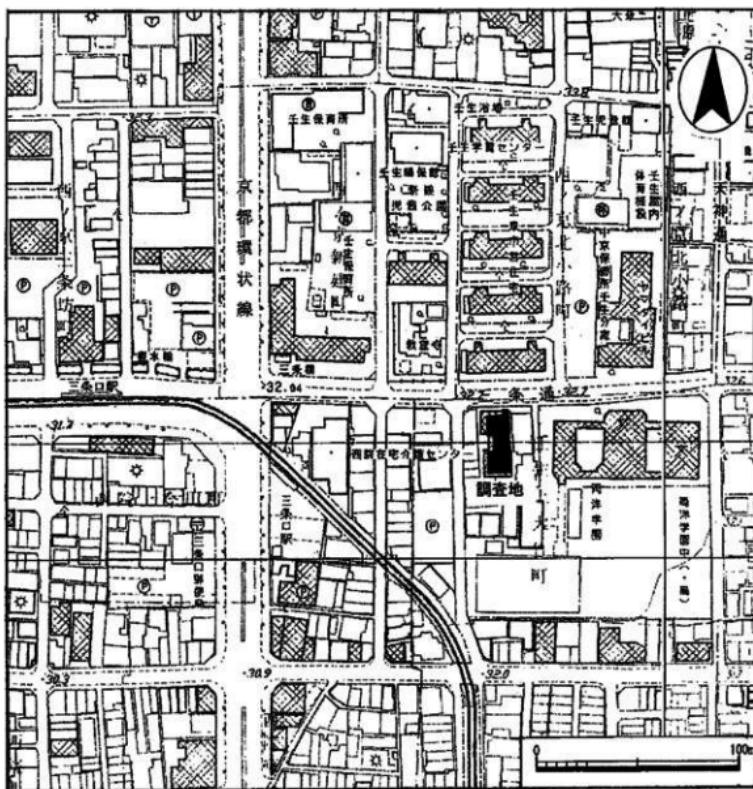
調査は、工事範囲を対象とし、その範囲に調査区を設定した。まず現近代の整地土を機械力で排土し、以下調査を実施した。その結果平安時代前期から中期に至る各時期毎の宅地利用の実体が明かとなった。



第1図 平安京条坊の調査地点

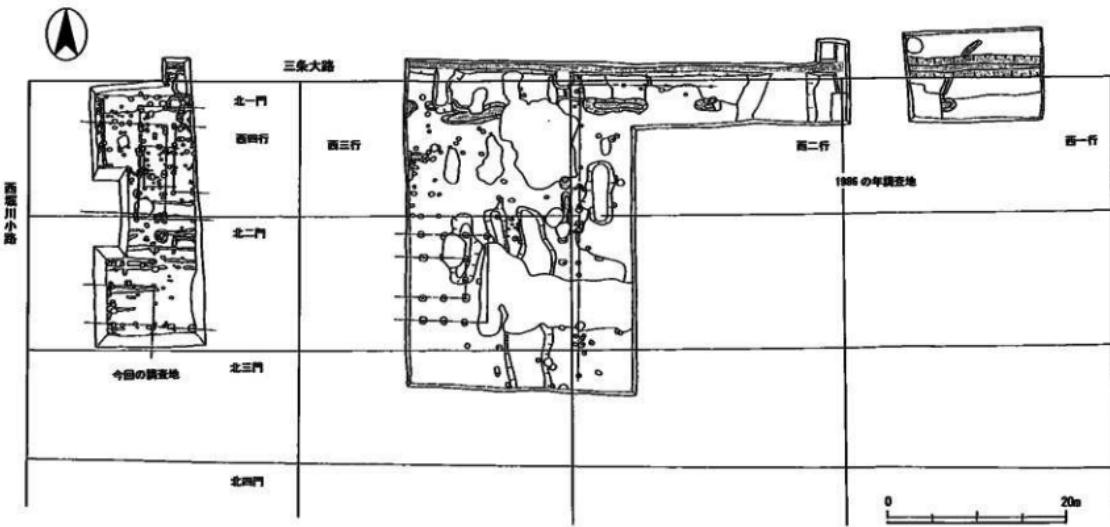
### 2 特記事項

調査の結果、平安時代前期から中期まで6時期に細分できる遺構群を確認した。平安時代の主要なものは、三条大路南側溝、築地、内溝、掘立柱建物、塀、小溝、井戸、土壙がある。その遺構群は、厚い泥土の堆積で覆われ、泥土上面から平安時代末の遺物が出土したことから、泥土の堆積時期は平安時代後期の初めから末にかけてのものであることが判明した。さらにその上には何度かの薄い砂層があり、さらにその上を2度以上の砂疊層で覆われていた。以後当地に人為的痕跡が認められるのは、江戸時代後期に至ってからであることも明らかとなつた。



第2図 調査位置図

第3図 附近の開墾地

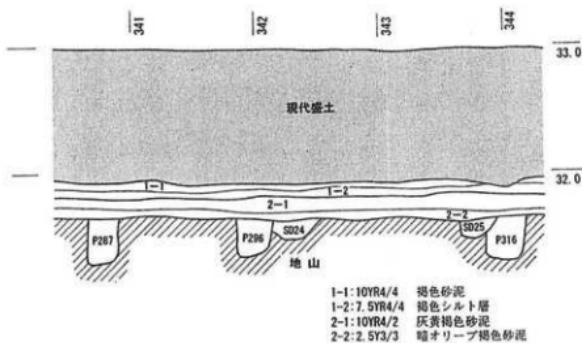


## 2 遺構

時代	遺構	備考
平安時代以前	土壤状遺構	
平安時代前期 ～中期	三条大路南側溝・築地・内溝、井戸 小溝、掘立柱建物、塀、土塁	
平安時代後期	泥土層	
時期不明	砂層・砂疊層	
江戸時代後期	井戸、方形土壠	

### 遺構の概要

今回の調査で検出した遺構群は総数366基を数え、平安時代以前の土壤状遺構を含めると江戸時代まで3時期に大別される。これらは各時代継続しているのではなく、平安時代後期から江戸時代中期までは顕著なものが多く、空白となっている。そして遺構のあり様にも5時期ごとに様相が異なっている。以下今調査で最も主要なものについて概略する。



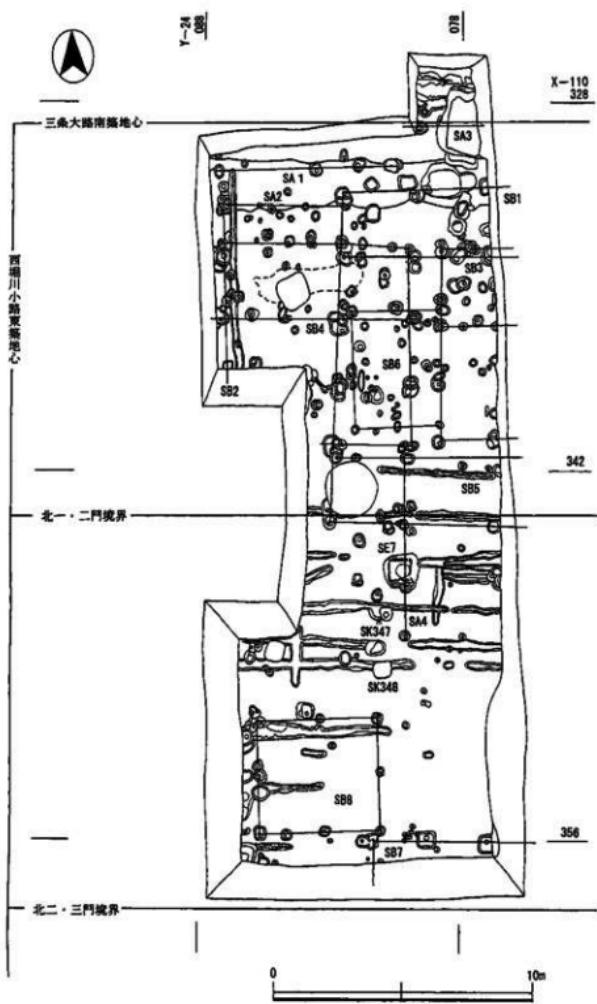
第4図 基本土層図

### 1 平安時代以前

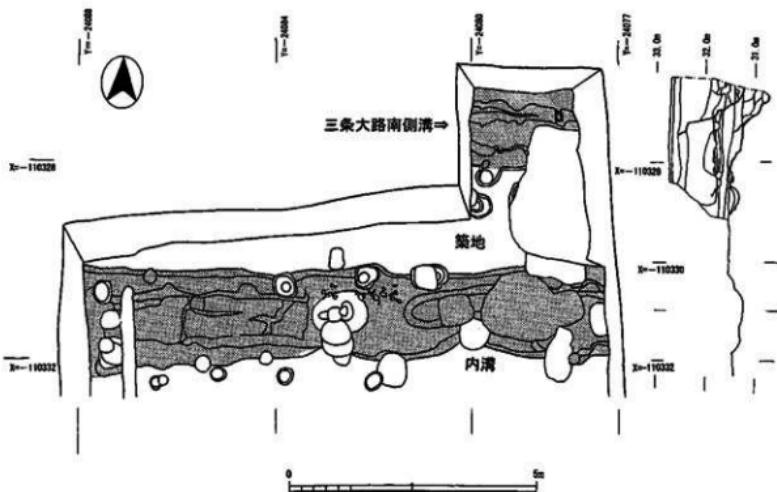
調査区北半平安時代の遺構群が成立している砂泥層を切り込むような黒色泥土の帯状堆積が認められる。その方向は北東から南西にかけての分布であり、さらに調査範囲内外に広がっている。層中から遺物の出土はなく、規模・時期については不明である。

### 2 平安時代前期～中期

大路と宅地に関連するものがある。大路には、路面整地層は調査範囲内で確認できなかったものの、前期の南側溝・築地と内溝、中期の塀を確認した。その内側溝は、幅0.8m以上、深さは0.55m以上を測り、断面逆台形を呈する。溝の南側中位には、杭跡と考えられる小穴を東西一列確認した。溝の堆積は、まず最下層に約13cm程



第6図 造構図



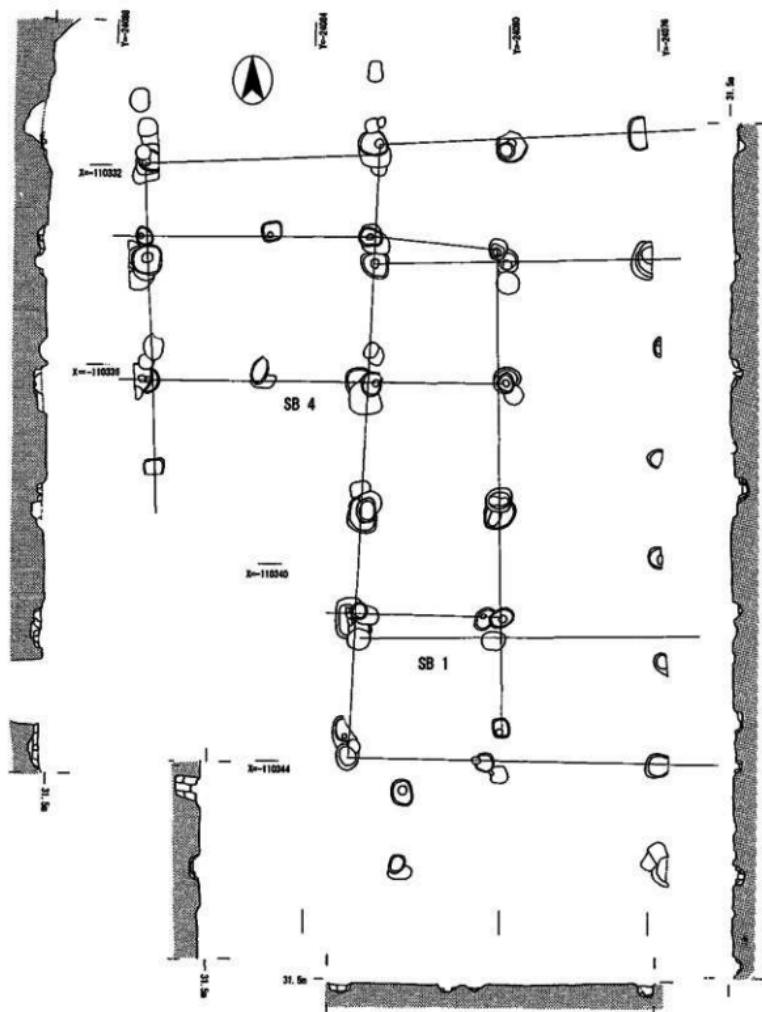
第6図 三条大路築地平面図・断面図

の砂礫層を確認した。その上位にオリーブ黒色泥土の堆積が15cm程認められ、9世紀中頃までの遺物が出土した。このことから砂礫層の堆積は、9世紀中頃以前となり、以後南側溝では、砂礫層は確認できなかった。また溝の肩部まで黒褐色砂泥が堆積し、10世紀後半までの遺物が出土する。このことから南側溝の存続は、10世紀後半までであったと考えられる。ただ最下層以外砂礫層を確認せず、泥土ないしは砂泥層だけが認められたことは、南側溝が排水路としてではなく、泥が溜るような湿地状を呈していたことが予想される。なおこの湿地化が始まるオリーブ黒色泥土層からは牛か馬の歯や桃の種子が出土する。

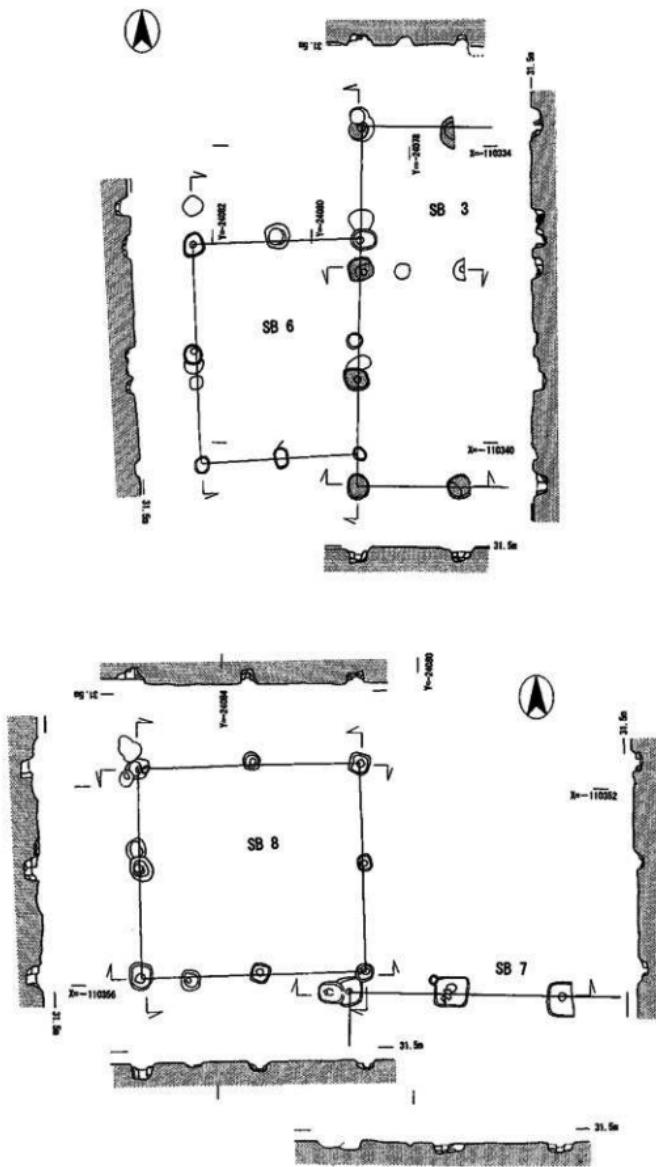
築地は、その基底部だけを確認することができた。基底部の幅は約1.8mで、地山を削り出して成形され、三条大路側での比高差は約23cm、宅地側では3cmである。基底部のほぼ中央に柱穴と考えられる方形ないしは円形の遺構が東西に2個確認した。遺構中から炭化物と共に10世紀前後の土器小片が出土したことから、この時期に築地から解体されたことが予想される。

内溝は、幅1.35～1.9m、深さ0.2～0.3mを測り、断面は浅いU字形を呈する。底部は平坦ではなく、所々土壤状を呈して窪む。南側溝の南肩から内溝北肩まで3mを測る。溝の埋土中から9世紀前後の遺物が出土することから、内溝は極短期間に廃絶したと考えられる。

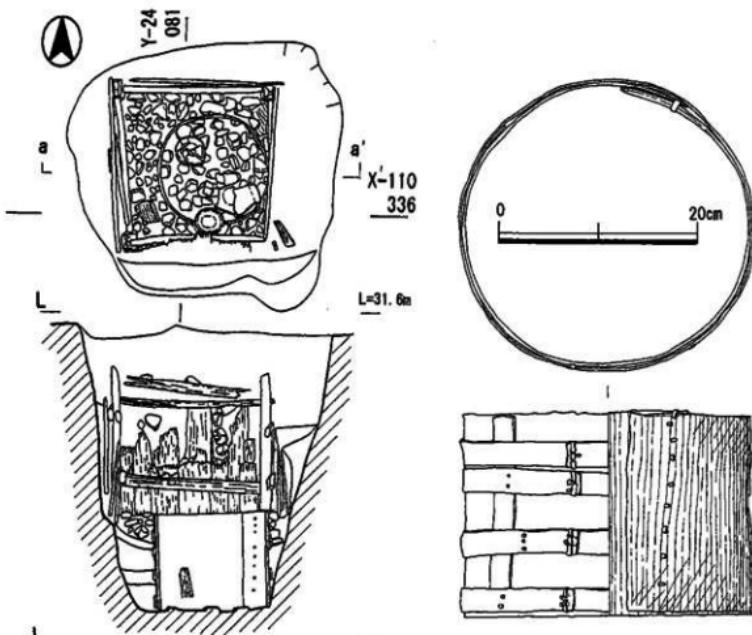
据立柱建物は、現在まで8棟確認している。建物1は、調査区北半、即ち北一門内で確認した。東西1間以上、南北5間で西に庇の付く南北方向の大規模なものである。柱間寸法は、桁行き8尺(2.4m)、梁行き9尺(2.7m)、庇の出10尺(3m)と広い。柱穴の中には立ち腐れた柱がいくつか確認できたことから、これは自然に朽ち果てたものと考えられる。なおこの建物の北側妻柱列は、三条大路南築地内溝が埋められた後に作られたことが遺構の重複関係から明かとなっている。建物2は、調査区北西隅で南北2間分を確認した。柱間寸法は、7尺(2.1m)等間である。これも内溝を埋め立てた後に作られたものである。建物1同様柱穴に立ち腐れの柱が認められる。塙の可能性もある。建物3も北半で確認し、東西1間以上、南北2間でさらに東に延びる。柱間寸法は東西7.6尺



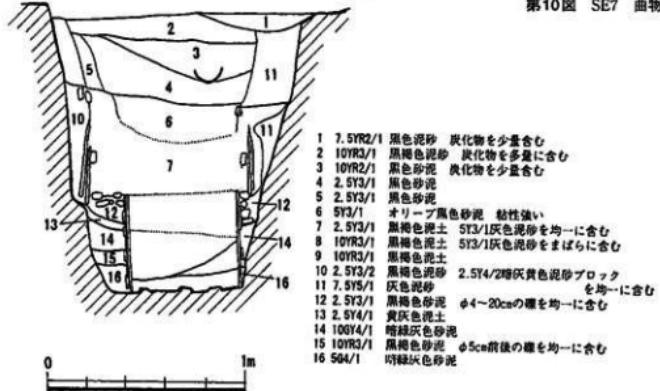
第7図 SB1・SB4 平面図・断面図



第8図 SB3・SB6 SB7・SB8・平面図・断面図



第10図 SE7 曲物



第9図 SE7 平面図・断面図・七層図

(2.3m)、南北7.3尺（2.2m）である。各柱当りから炭化物の出土が認められることから、火災で焼失したと考えられる。建物4も北半で確認し、南北4間、東西3間以上で北と東に庇の付くものである。柱間寸法は桁行き8尺（2.4m）、梁行き7.5尺（2.25m）、北と東の庇の出が9.3尺（約2.8m）と建物1に次いで広い。柱掘り形の何れからも火災に伴う炭化物の出土がみられる。建物5は調査区東端で南北方向に5間ほど確認した。柱間寸法は、北端1間が6尺（1.8m）以外は、7尺（2.1m）等間となる。塀の可能性もある。建物6も北半で確認し、東西2間、南北2間のやや南北に細長く、小規模である。柱間寸法は東西5.3尺（1.6m）、南北7.2尺（2.16m）である。建物7は調査区南半、北二門内で東西2間分確認した。柱間寸法は7尺（2.1m）等間である。塀の可能性もある。柱掘り形に炭化物が微量に含まれる。建物8も南半で確認した東西2間、南北2間のやや東西に長く小規模なものである。柱間寸法は東西7.7尺（2.3m）、南北7.2尺（2.16m）である。柱掘り形のいくつかには火災による炭化物の混入がみられる。これらの建物群の方位は、建物5が北にほぼ真南北を呈する以外、僅かに東に振れ、平安京の条坊の振れと異なる。

塀は、まず三条大路南築地内溝北肩沿いに溝底絶後、東西方向に1条4間分ほど確認した。柱間間隔は西から8尺（2.4m）、4.3尺（1.3m）、5.7尺（1.7m）、4.3尺（1.3m）となる。ついで建物4の北妻側柱列の外にそれと並行して東西に1条確認した。柱間間隔は5.8尺（1.74m）等間である。建物4の梁行き側柱列の北にも東西に1条2間以上を確認した。柱間寸法は9.7尺（2.91m）等間である。さらに建物4の桁行き側柱列の西に1条2間分を確認した。柱間間隔は8尺（2.4m）等間である。またその南延長部建物1と4に接するように、1条南北2間分を確認した。柱間寸法は6.7尺（2.01m）等間である。これらの欄列の方位は北で僅かに東に振れ、建物群の方位に類似する。

井戸（SE7）は、建物1及び4のすぐ南、北一・二門境界に位置する。掘り形は、径1.3mの兩丸方形状を呈し、深さは1.45mを測る。その西寄りに東西80cm、南北90cmの方形縦板組の井戸枠がある。板は2～3枚組み合わせて使用され、底部から約35～55cm残存し、その間に横棟が、2段確認された。底部やや東寄りに径55cm、深さ60cm程の曲物が1段掘えられている。井戸底部や曲物の底は拳大の河原石が敷き詰められていた。井戸曲物内から9世紀末頃の土器類が出土した。なお井戸枠上部において10世紀中頃の土器類がまとまって出土したことから、廃絶した後のゴミ溜として廃棄されたと考えられる（第9・10図）。

小溝群は調査区西端で南北方向に1条ある以外は、北一・二門境界付近及び北二門内で確認した。これらは径15～30cm、深さ15cm程の小規模なものである。溝内からは遺物の出土もほとんどなく、柱穴、溝同志の重複関係から、9世紀前後と9世紀後半代を中心とする時期の2時期に分かれる。

土墳群の内、建物3の北西で確認したSK5は、南北約65cm、東西約45cmの楕円形を呈する。掘り形の深さは7cm前後と浅く、その東西脇に、径15～25cmの河原石を3石程南北に並べ据えている。石で囲まれた中は平坦で薄い炭化物の層が確認できる。また石の表面には焼けたものもあることからここで何等かの火を使用した可能性がある。遺構内とその周辺から土師器杯・皿類の破片が主で土師器壺などの目立った出土は認められなかった。また北二門内の建物8のやや北西に位置するSK8は、東西70cm、南北約80cmの円形に近い楕円形を呈する。掘り形の深さは8cmと浅く、その中に径10～20cmの河原石が9石ほど塊状に認められた。河原石群の南端中程に土師器皿が1枚完形で正置された状態で認められた。井戸と建物8の東側柱列との間で南北方向に2基の土墳群が確認された。2基とも径55cm前後の円形に近い楕円形を呈し、深さも約20cm前後と類似する。但し底の形状が347が半球形に近いのに対し、348は平底である。両者共遺物の出土は少なく、しかも同一個体と考えられる須恵器壺の破片が各々から出土する。そのためその形状に違いはあるものの、両者の性格は類似し密接な関係であったことが想像される。

### 3 江戸時代後期

この時期のものは、三条通沿いで井戸、土壙などがあるに過ぎない。

井戸は調査区北西隅で1基確認した。径約1.3mの円形で深さは1.5m以上を測る。井戸枠は、掘下げた範囲内では確認しなかったが、掘り下げ中から漆喰の枠組み片が出土することから、漆喰製であったことが予想される。

土壙は、調査区北東隅、平安時代の三条大路南側溝、同築地を重複したSK1、内溝と重複するSK2がほぼ南北に配置される。SK1は東西1.6m以上、南北2.7m、深さ約90cmの長方形を呈する。底は平坦で、断面逆台形を呈し、壁の傾斜は急である。遺構の埋土中に砂疊層が厚く認められ、洪水などにより埋まつた可能性がある。SK2は東西1.6m、南北1.55mの隅丸方形を呈し、深さは55cmほどである。底は平坦で、壁はほぼ直立する。埋土には砂疊層が確認されなかった。

### 3 遺 物

時代	層名	遺 物	備 考
古墳時代	平安時代の遺構に混入	土師器、須恵器	
平安時代前期	側溝、内溝、柱穴、小溝、土壙	土師器杯・皿・高杯・壺、黒色土器A類杯・壺、須恵器杯A・杯B・蓋・壺・瓶、京都産綠釉陶器、東海産綠釉陶器、灰釉陶器、白磁、越州窯系青磁、平瓦・丸瓦、製塙土器、木製品、動物骨、鉄器	
平安時代中期	柱穴、井戸、土壙、小溝	土師器(手の字口縁)杯・皿・土釜、黒色土器B類碗、須恵器碗・瓶・壺、近江産綠釉陶器、京都産綠釉陶器、灰釉陶器、越州窯系青磁、井戸枠、	
平安時代後期	泥土層	土師器皿、東播系捏鉢、瓦器碗・鍋・釜・壺、白磁、青磁、青白磁、須恵器壺、白色陶器	
鎌倉時代	砂層	土師器皿、瓦器碗・皿・釜・鍋、東播系捏鉢、白磁・青磁・青白磁、須恵器壺	
江戸時代後期	井戸、土壙	土師器皿・火鉢・肥前磁器、京・信楽系陶器・壺・明石檣鉢・土人形、瀬戸陶磁器、唐津陶器、鉄製品、寛永通寶、銅製品、	

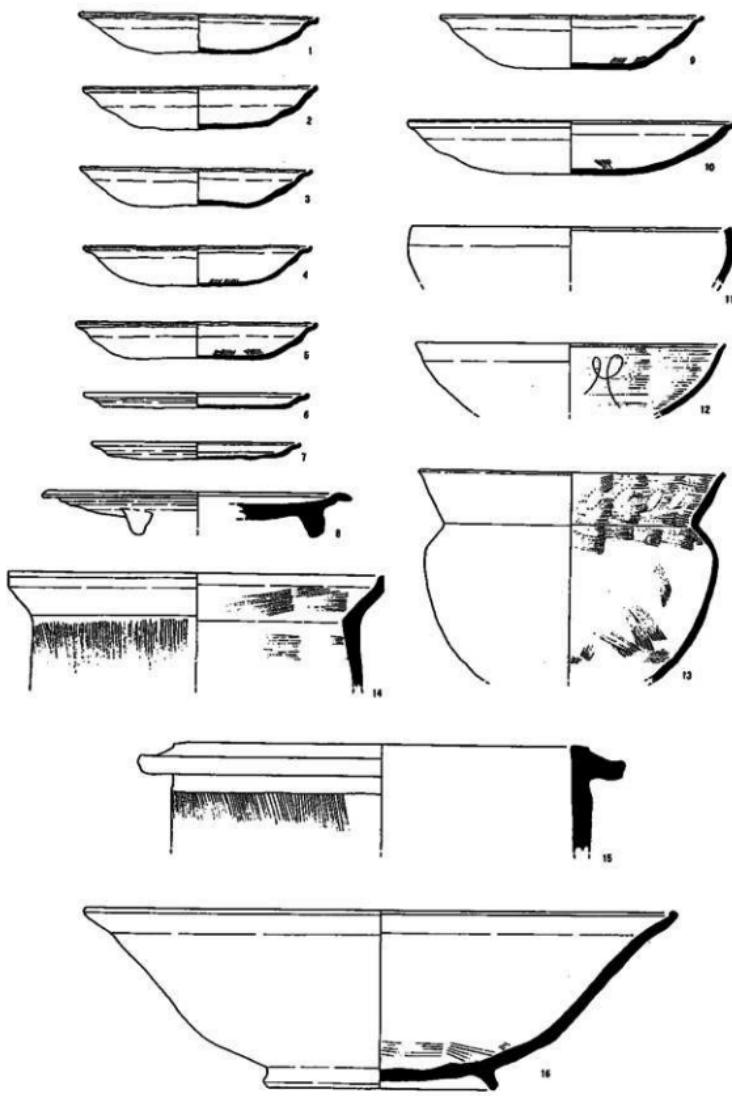
#### 出土遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は、整理箱で27箱で、時期は古墳時代から江戸時代の長期にわたる。内訳は平安時代のものが圧倒的多数を占め、ついで江戸時代、平安時代末から鎌倉時代となり、古墳時代のものは数片に過ぎない。そして器種別にみると、土器、陶磁器、土製品が圧倒的多数を占め、瓦類は少なく、銅製品、鉄製品、木製品に限って極僅かに過ぎない。

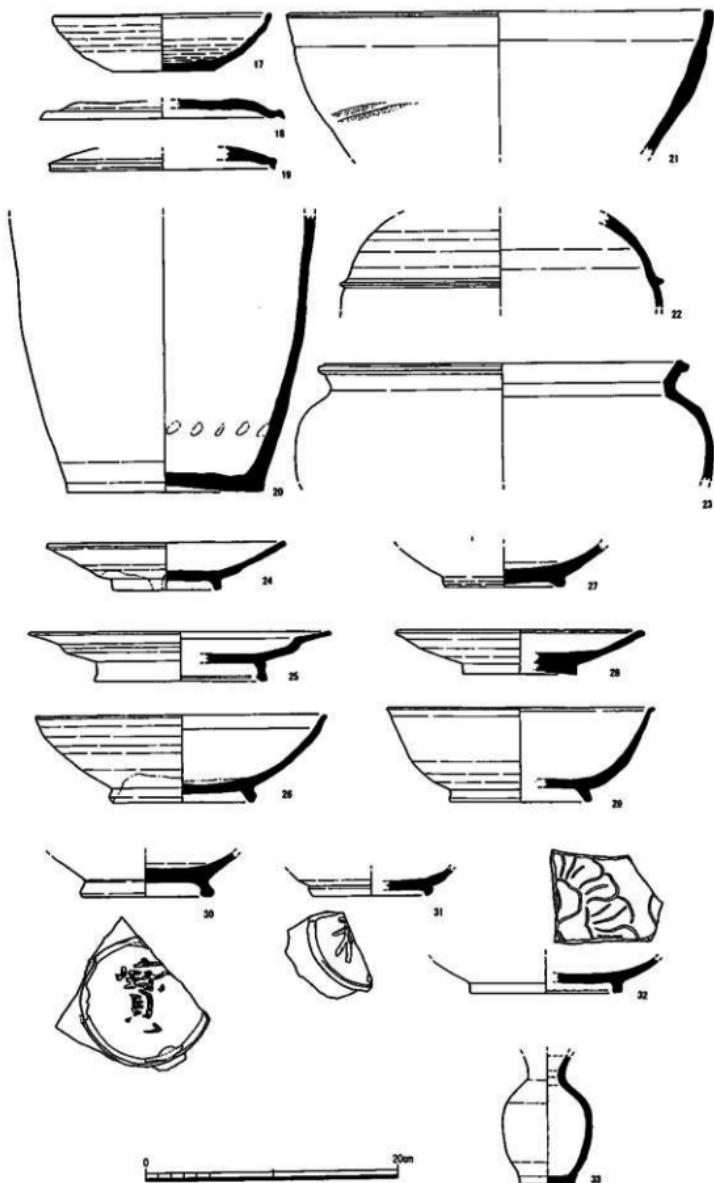
古墳時代の遺物は、平安時代の遺構中から混入として出土し、破片は小さく、摩滅はあまり受けていないが、器種を判別するまでにはいたらない。

平安時代の遺物の内前期から中期のものが主体で、まとまって出土したものはあまりない。内訳は土師器杯・皿が大部分を占める。平安時代前期のものは、三条大路南側溝や同内溝、宅地内の柱穴出土のものがあるが、何れも破片でしかも点数が少ない。

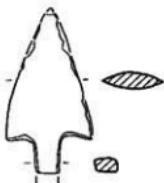
平安時代中期のものは井戸、土壙、柱穴などから出土する。その中で井戸底から前期末の土師器杯・皿・鉢が完形に近い状態でまとめて出土する。またその上部からは中期の土師器杯・皿・土釜、黒色土器B類碗・A類



第11図 出土遺物 (1)



第12図 出土遺物 (2)



第13図 鉄錫（実大）

甕、白色陶器、灰釉陶器、須恵器甕などが比較的まとまって出土した。またSK8からは土師器杯の完形が1点出土する。この時期の柱穴から土器類が少なからず出土するが、その中には縁釉陶器甕の比較的大きな破片や鉄錫（時期としては前期の可能性が高い）が出土するものがある（第13図）。

平安時代後期から鎌倉時代のものは、いずれも泥土や砂の層から出土し、小破片のものが大部分を占める。ただこれらの中から平安時代のものが混入するが、土師器杯・皿の出土は少なく、代わりに灰釉陶器碗・皿・黒色土器甕・須恵器瓶・壺が目立って多い。

江戸時代のものは、調査区北端三条通沿いの井戸や土壌から出土する。

内訳は江戸時代後期のものばかりでそれ以前のものはほとんどない。このうちSK1からややまとめて出土する。内訳は土師器皿や京・信楽碗皿類が全く含まれず、肥前磁器の広東型碗・くらわんか皿・蛇の目凹形高台鉢、京・信楽鉄釉瓶・甕・行平・堺・明石播鉢、棧瓦などがある。

第11図1はSK8出土の土師器の壺A、11はSD22出土の土師器鉢、他は全てSK7出土。2~5は土師器壺身A、6、7は10世紀中頃の土師器の皿、8は土師器の三足盤、12は黒色土器A類の甕。13は黒色土器A類の甕、14は土師器の甕、15は土師器の羽釜、16は土師器の盤。第12図17は須恵器の壺身、18、19はSD22出土で、18は須恵器壺Bの甕、19は須恵器蓋の甕、20はSD21出土の須恵器蓋N、21は須恵器鉢、22、23、25、26、27、30、33はSK7出土。22は須恵器突付壺、23は土師器甕、26は灰釉陶器、27は縁釉陶器、30は灰釉の椀底部で「寅」の墨書きがある。33は須恵器の甕、24は築地南出土の灰釉陶器の皿、25はSK5出土の灰釉段皿、28は築地南側溝犬走り出土の縁釉皿、29はSB8出土の縁釉椀、31は灰釉陶器の底部で墨書きがある。32はP272出土の縁釉盤。

#### 4 まとめ

今回の調査結果により、右京四条二坊八町の北西部の宅地の変遷状況を平安京造営当初から10世紀中頃まで6度の作り替えを経て利用された宅地であったことが判明した。従来このように長期にわたって利用された宅地例は二条以北や七条の西市付近以外の右京ではほとんど見られず、平安京右京の宅地利用の変遷を知る上で重要な成果をあげることができた。その変遷の過程と遺跡の特徴を以下に要約する。

まず平安京造営当初、即ち9世紀前後の遺構（I期）として、三条大路南側溝、同築地と内溝などの条坊間連遺構と、北一・二門境界付近で検出した東西方向の小溝がSD21である。この時期の宅地内には明確な建物遺構は存在せず、当調査地は、小溝群の存在から居住部分ではなく菜園あるいは畠地に利用されていたと考えられる。II期（9世紀前半）になると、調査区内に建物群が造営され、居住空間として利用され始める。三条大路南築地の内溝は埋め立てられ、その部分も利用しつつ建物群は、北一門と北二門に2棟と1棟確認できる。その中でも北一門内の建物1は、南北5間、東西1間以上で西に庇の付く南北方向の大規模建物で、北の妻側は南築地と僅かに2.3mと接するように位置する。柱間寸法は庇の出が10尺（3m）、桁行き8尺（2.4m）、梁行き9尺（2.7m）である。この建物1と並行するように調査区西端でも南北の柱列2が確認された。これらの建物群の柱穴には、立ち腐れとなった柱が幾つか見られることから放置されて朽ちたことが想像される。III期（9世紀中頃～後半）は調査区内に明確な建物は検出されず、北一・二門境界すぐ南で東西方向の小溝群だけが確認されることから、再び小規模の菜園ないしは畠地として利用されたと考えられる。IV期（9世紀後半）になると、北一門内に小規模な建物3が確認できる。これは梁行き2間で7.3尺（約2.2m）等間、桁行き1間以上、7.6尺（約2.6尺）でさらに調査区外東に延びていることが予想される。建物柱当りの何れもから炭化物が多く認められたことから、火災にあったと考えられる。V期（9世紀末～10世紀初頭）になると、再び調査区内の北一門・北二門内に各々建物が

1棟ずつ認められる。特に北一門内の建物4は南北4間、東西3間以上で東と北に庇が付く南北棟に想定できる。桁行きは8尺（2.4m）等間、梁行きは7.5尺（2.25m）等間、北と東の庇の出は9.3尺（約2.8m）と広い。建物の東南端から少し隔てたところに方形横桟縦板組の井戸を1基を検出した。三条大路南築地は、作り替えられ、東西方面の堀となっている。これらの建物群や堀の柱掘り形内には、多くの炭化物が出土していることからⅣ期の火災後に造られたと考えられる。VI期（10世紀前半～中頃）は、北一・二門内に各々建物を1棟ずつ確認した。建物6は東西2間、南北2間で南北方向にやや細長い。東西は5.3尺（約1.6m）、南北7.2尺（約2.15m）等間と小規模である。建物8は東西2間、南北2間あり、やや東西に細長い。東西は7.7尺（約2.3m）、南北7.2尺（約2.15m）間隔であるが、東西南北の中央筋筋がどちらかにずれている。この時期井戸は埋まり、ゴミ捨て場となる。そのまま東にはこれを隠すように南北2間の壁が1条ある。

各時期の移行の性格について遺物の出土から現在まで判断できるものではなく、かつその量も少ないとから、厨房など日常生活との関わりがあり伺えない。また正殿に相当するようなハレの場を示す施設も認められなかつた。1986年度の両洋学園内の調査で3面庇付の正殿に相当する掘立柱建物が認定されている。のことや八町の北西隅に調査区が位置することから、検出した遺構群は、これらに付属する施設の可能性が考えられる。その中で注目されるものにV期の建物柱掘り形から鉄釘が1点出土したことである。平安京内でも出土例が極めて珍しく、その使用について、文献資料にみる産屋に於ける儀式の一つ「桑の弓、蓬の矢」との関連が予想され、確認した建物の中に産屋に関連するもの可能性もある。また『平安遺文』弘仁八年（817）八月十一日条にみる從八位上三善宿禰弟正と從七位上姉が右京四条二坊に戸主としてあげられる記載と建物群の出現時期が符合することは、当地の主も同時期に貢付された可能性も考えられ、興味深い。

また宅地利用の終わりが10世紀中頃から後半で、以後湿地と考えられる泥土層の堆積がみられる。当地は、故実叢書本『拾芥抄』に「小泉」となっており、その意味付けに関して從来諸説あったが、泥土層の時期と『拾芥抄』の書かれた時期が類似することから、その解明に手がかりを提供したことになる。

さらに調査地に明確な遺構が現れるのは、江戸時代後期になってからである。当地は桃山時代に秀吉により御土居が作られた際、そのすぐ内側に相当した。しかも江戸時代の文献から当地付近に刑場があったことがしられ、從前両洋学園の体育館建設時に多量の江戸時代の墓が発見されたことはこれを裏付けるものである。発見された遺構群は性格に関連するもので、当地が刑場としての機能が喪失された時期が、これらの遺構群が作られた時と考えられ、江戸時代後期18世紀末生活空間へと当地が大きく変貌したことが伺える。

## 『平安遺文』 ○ 四三

山城國紀伊郡司解案 ○仁和寺文書

紀伊郡司解 申立賣家券文事

合家壹區 地參段、在物板屋參字 一字三間板敷在底二面二具  
一字七間在一具一字二間無戶

屋柱十三根

四至 限東南公田 限西三善宿禰家  
限北秦忌寸繩維家

在九条深草里卅三卅四坪

右、得管深草鄉長 木勝宇治麻呂解状僕、.... 下  
秦忌寸三裳麻呂戸同姓阿古刀自辭狀云、巳姓女秦忌寸  
諸刀自家、以錢貳拾貫文宛價直、..... 右京  
四条二坊戸主從八位三善宿禰弟正戸從七位上同姓  
姉既畢者、望請、依式欲立券者、郡、.... 勘、所陳知  
實、仍勘賣買兩署名、立券文如件、以解、

賣人秦忌寸、.....

相賣大初位下秦忌寸三裳万呂

蔵孫秦忌寸祥家

買人從七位下三善宿禰

刀禰正八位下木勝淨麻呂

外大初位下、、

熟七等末使主廣立

鄉長熟九等木勝宇治万呂

弘仁八年八月十一日 主張少初位下 忌寸

## 『統日本後紀』卷第五

仁明天皇 承和二年二月

○ 戊子、授无位源朝臣鎮從四位上、河内國人右少史掃守連豐永、少典鑑同姓豐上等、  
賜姓普世宿禰、天忍人命之後也、

仁明天皇 承和三年八月

○ 辛亥、河内國人佐少史普世宿禰豐上等、改本居、賞附右京四条二坊

# 図版



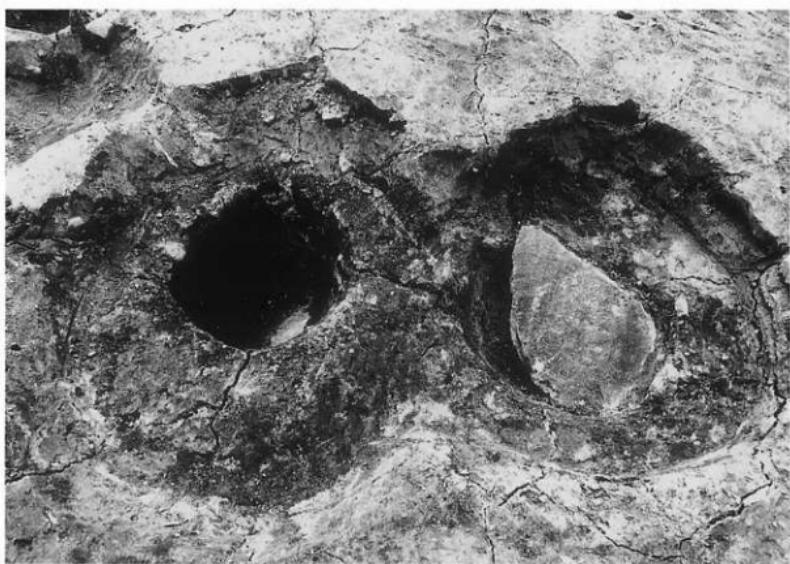
1 調査前風景（南から）



2 調査区全景（北から）



1 SE7 (東南から)



2 SK228・229 (東から)

## 報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうううきょうないごいせき							
書名	平安京右京内5遺跡							
副書名	平安京右京三条二坊十四町跡							
巻次								
シリーズ名	平安京跡研究調査報告							
シリーズ番号	第23輯							
編著者名	江谷 寛							
編集機関	(財)古代学協会							
所在地	〒604-8131 京都府京都市中京区三条高倉				TEL 075-252-3000			
発行年月日	平成21年3月31日							
ふりがな 所収遺蹟	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺蹟番号	・	・	・	・	・	・	
へいあんきょ ううきょうし じょうにほう はっちょうあ と  平安京右京 四条二坊 八町跡	きょうとしなか ぎょくくかみお おたけちょう  京都市中京区上 大竹町13	26100		35° 00' 29.38"	135° 44' 02.43"	1997年2 月12日 ～5月30 日	345m <sup>2</sup>	建物建築 工事
所収遺蹟名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平安京右京 四条二坊 八町跡	都城跡	古墳時代	土壙	土師器、須恵器				
		平安時代	三条大路南側溝・築地、井戸、 掘立柱建物	土師器杯・壺、壺、 黒色土器 A類杯・壺 須恵器杯 A・B、縁輪 陶器（京都・東海）、 灰釉陶器、白磁越州 窯系青磁、黒色土器 B類碗				
		鎌倉時代	砂層	東播系捏鉢、瓦器碗、 白磁・青磁、土師器皿				
		江戸時代以降	井戸、方形土壙	土師器皿・火鉢、肥 前磁器、京・信楽系 陶器、唐津、土人形、 錢				

# 平安京右京六条四坊七町跡

西院月双町 マンション新築工事に伴う発掘調査

## 例　　言

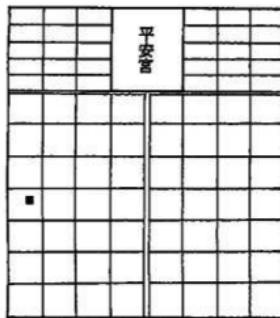
- |             |                         |
|-------------|-------------------------|
| 1　遺　跡　名     | 平安京跡（平安京右京六条四坊七町）、西京極遺跡 |
| 2　調　査　所　在　地 | 京都市右京区西院月双町119番地        |
| 3　委　託　者     | 株式会社 大林組                |
| 4　調　査　期　間   | 平成17年（2005）3月1日～5月13日   |
| 5　調　査　面　積   | 約700m <sup>2</sup>      |
| 6　契　約　番　号   | 略記号：04HK-U7             |
| 7　調　査　擔　當　者 | 堀内明博                    |
| 8　実　勤　日　数   | 64日                     |
| 9　延　べ　人　数   | 補助員 180人　　作業員 600人      |

## 1 調査概要

### 1 調査概要

本調査は、京都市右京区西院月双町119番地に所在するマンション新築工事に伴う発掘調査である。調査地は、京都の市街地の南西、葛野大路と五条通りの北東に位置する。現況の標高は約21.7mである。当地は平安京の右京、東を菖蒲小路、西を山小路、北を樋口小路、南を六条坊門小路に囲まれた宅地で、六条四坊七町の南東にあたり、その東一行～東二行北六～八門に相当する。調査区は工事範囲をもとに、行政指導にもとづき敷地内に3ヶ所設定し、東を第1トレンチ、西南を第2トレンチ、西北を第3トレンチとして調査をおこなった。

当地域周辺では、これまでに二町北西隅と六町と樋口小路、九町北端と五条大路、四坊内の15次の試掘調査、22次の立会調査が行われている。この内二町北西隅では、平安時代の遺構は樋口小路南側溝のみで、宅地内には主要な遺構を確認できなかった。その一方、弥生時代後期の堅穴住居を5棟発見し、弥生土器とともに石斧、石劍、石鎌、石包丁、砥石、土錐などが出土し、集落の中心域に想定される。六町では五条大路の南側溝と路面、そこに残された織や足跡が確認された。そして古墳時代後期の堅穴住居3棟や前期の土器類なども検出した。これらの成果から平安京に関連するものが希薄であるのに対し、それ以前の遺跡が良好に残存していることが知られる。それは東西約400m、南北約1kmの範囲におよぶ集落の西京極遺跡に該当する。集落の立地は、桂川左岸に形成された自然堤防状上に位置し、当調査地の西方には旧天神川、東方が旧島津製作所五条工場跡地で確認された、绳文時代から古墳時代にかけての旧河川に挟まれた、微高地上に営まれた集落に想定される。本調査でもその遺跡範囲の中心付近に位置することから、その実体解明が期待された。そして平安京についても六条坊門小路が調査区南側で推定されており、これに類する遺構の確認が予想された。

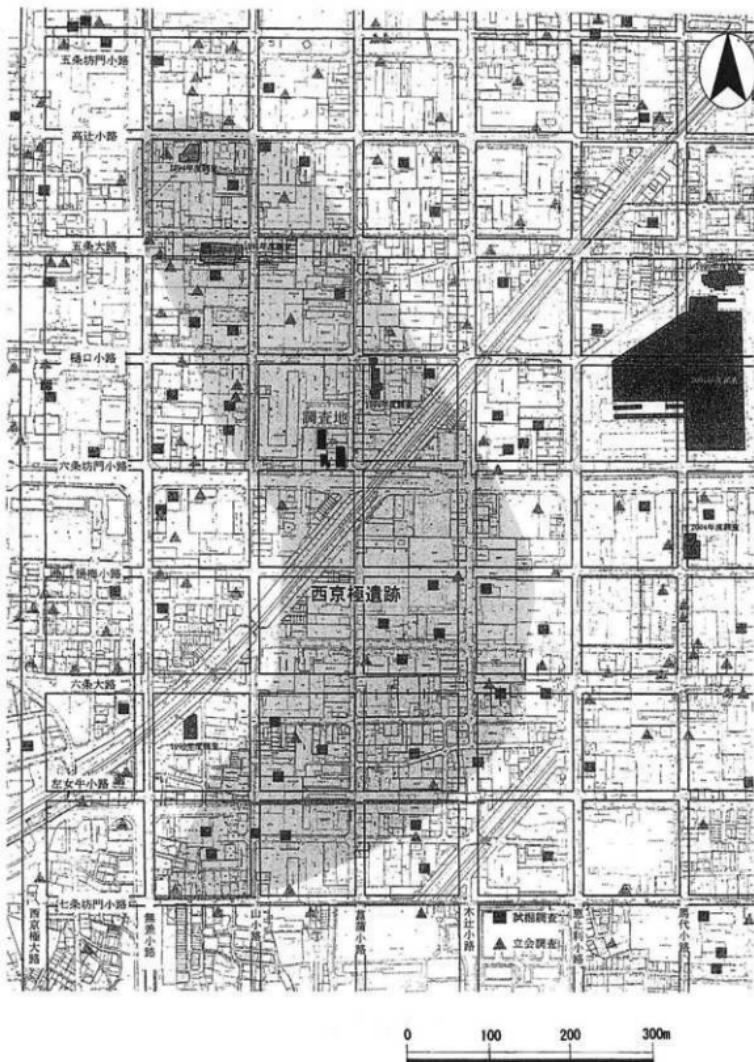


第1図 平安京条坊の調査地点

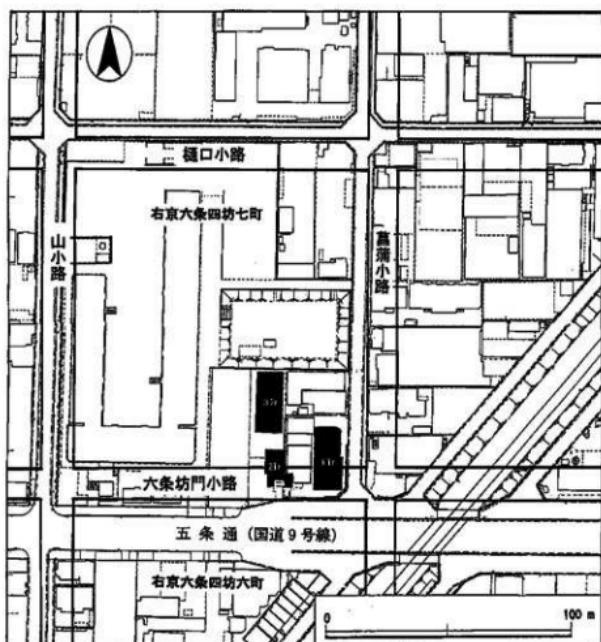
## 2 特記事項

調査の結果、六条坊門小路北側溝は、想定位置では確認できず、それよりも2mほど南側で近現代の大溝に削平をうけており調査区内で条坊に関連する遺構は確認されなかった。

また、平安時代に該当すると考えられる遺構として柱穴などがあるが、全体としては非常に希薄で、これに比べて弥生時代、古墳時代の遺構の遺存状況は良好かつ密度が高い傾向にある。弥生時代から古墳時代の遺構とし



第2図 調査位置図



第3図 洪水区配置図

ては、要穴住居址9棟、環濠、溝、土壤などが確認された。平安時代以前の出土遺物として、石鎚、石庖丁、敲石、管玉、碧玉などが多量に出土した。

## 2 遺構

遺構総数：1230基

時代	遺構	備考
近世・現代	南北・東西小溝、土壙、池状遺構、河川	
平安時代前期以降	柱穴、溝	
弥生時代中期～古墳時代	環濠、堅穴住居址、土壙、溝	

### 遺構の概要

本調査により確認された遺構総数は1230基を数え、弥生時代から近代に至る。これらは継続するものではなく、弥生時代、古墳時代、平安時代、近世・近代の4時期に大別され、それぞれ性格の異なる遺構であることが判明した。以下に主要な遺構について概観する。

### 1 基本層序

調査地の基本土層は、現地表面下0.3～0.5mが近現代の盛土で、次いでその下0.05～0.1mが中世から近世にかけての耕作土層（5Y3/2オリーブ黒色砂泥～5Y4/2灰オリーブ色砂泥）である。この層は、近現代の盛土により調査区の西半では部分的に確認したにすぎない。その下に地山（7.5YR6/3に近い褐色砂泥）が存在する。調査区1・2トレンチの南端は、近現代の河川により削平されており、これ以前の遺構は確認されなかった。

### 2 平安時代から近世

第1～3トレンチで、中世～近世にかけての耕作溝、土壙、柱穴、溝、木棺墓1基を確認した。

第2トレンチ南西部のSX 1で、有蹄動物の足跡を5個確認した。また、六条坊門小路の北築地心から南に約5.5mの所で東西方向の川跡（SD 2）を確認した。昭和28年の地図で確認することができ、その頃まで存在していたようである。

第3トレンチ南西部のSK175は方形を呈し、長軸約1.7m、短軸約1.3mを測る。底部に0.3×0.8mの範囲で板材を確認し、掘形北東隅で土師器皿五枚が板材に挟まれる状態で正置されていた。出土状況などから木棺墓と考えられる。

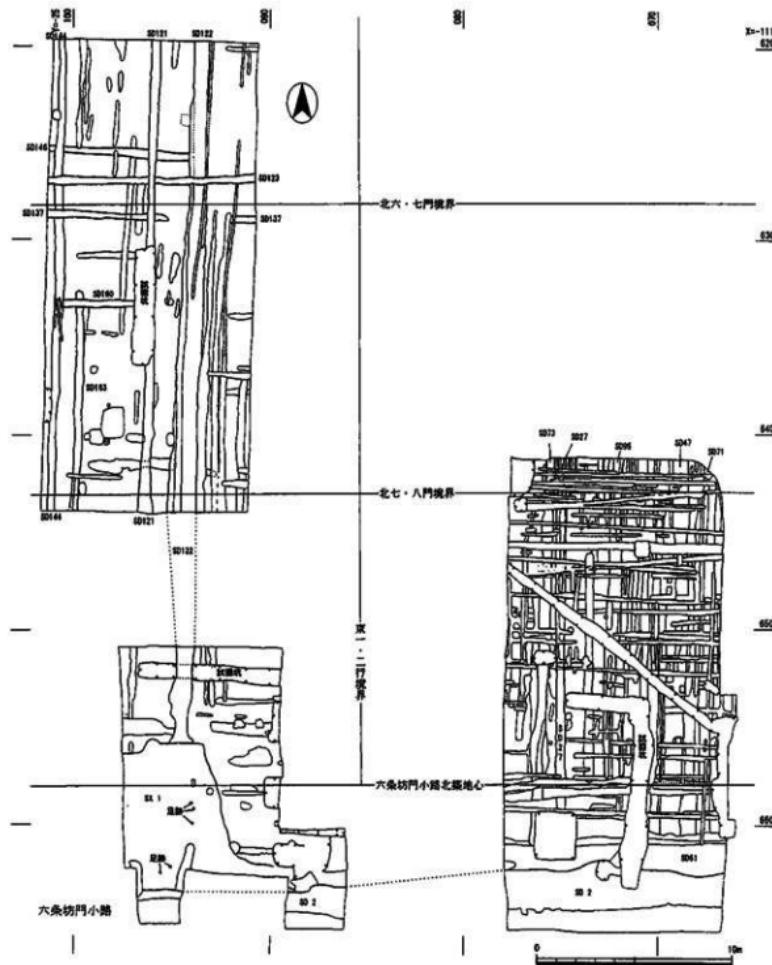
また、第1～3トレンチで幅0.6～1m、深さ0.2～0.3mの逆台形のやや大規模な南北溝を3条確認した。これらは他の溝より古いものと考えられる。

### 3 弥生時代から平安時代以前

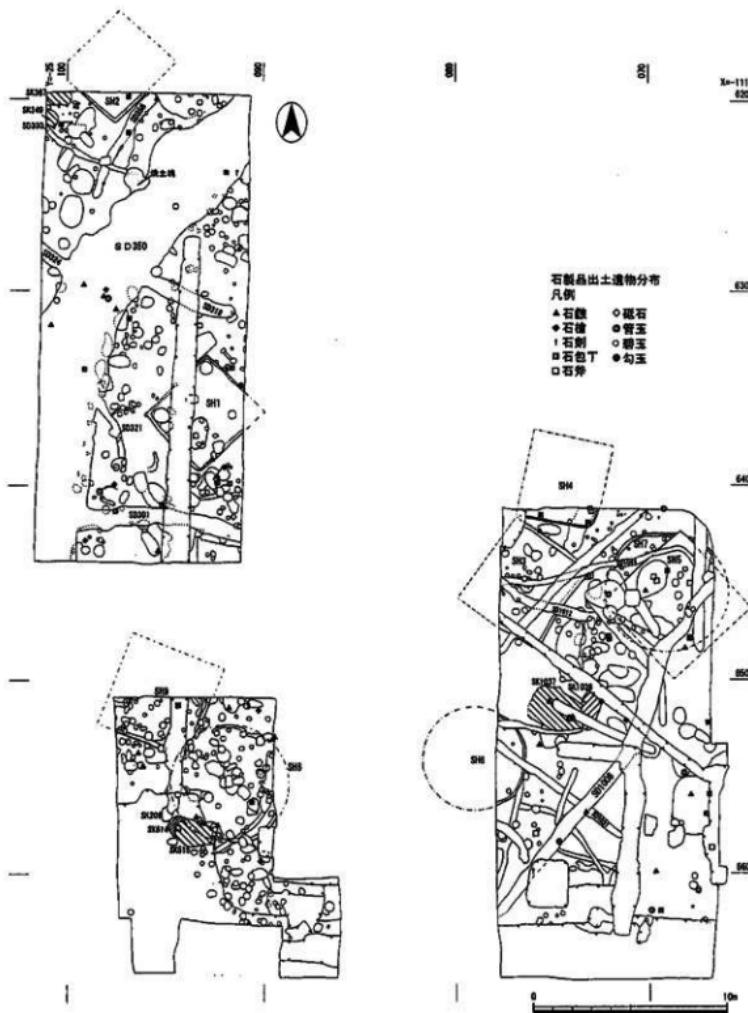
堅穴住居址9棟、環濠、溝、土壙などを調査区全般で確認した。

#### 第1トレンチ

SH 3は一辺約5.0mの隅丸方形堅穴住居址で、調査区北西隅にある。周溝は幅0.15～0.25m、深さ約0.15mを測る。中央部に方形の掘形（0.4×0.7m）をもつ土壙があり、そのほぼ中央に凹レンズ状の焼土塊を確認したことから、炉と判断した。



第4図 造構図（平安時代から近世）



第5図 遺構図（弥生時代～平安時代以前）

SH 4は隅丸方形竪穴住居址で、調査区北端部にありその南東側の一部を確認した。周溝は幅約0.2m、深さ約0.2mを測る。

SH 5は隅丸方形竪穴住居址でSH 3の東約2mの所にある。周溝は幅約0.3m、深さ0.3mを測る。南半を土壇などに削平され全容は確定できないがSH 3と同様の建物主軸方位をもつ。

SH 6は、調査区西端で約1/3を確認した円形竪穴住居址で、直径は約5.6mと推定される。周溝は幅約0.2m、深さ約0.2mを測る。南端で周溝に接続するようにSD1024を確認し、排水溝と考えられる。幅0.2~0.3m、深さ約0.2mを測る。

SH7は、調査区北端で1/3ほどを確認した円形竪穴住居址で、周溝の北側約1/3を確認しただけである。直径は約6.4mと推定される。周溝は幅0.15~0.2m、深さ約0.25mを測る。

SD1008は、北東から南西方向の溝で、長さ約20mを確認した。幅0.8~1.0m、深さ約0.3mを測り、断面は逆台形を呈する。なお、この溝に直交するSD1031は、幅約0.4m、深さ0.1mを測る。

#### 第2トレンチ

SH 8は円形竪穴住居址で直径は約6.2mと推定される。周溝は幅0.12~0.18m、深さ約0.05mを測る。他の遺構との切り合い関係上、残存状況はよくない。床面の整地土は確認できなかった。住居南側で周溝が二重になっているため、南へ拡張された可能性も考えられる。また、SH 8の南西側でSK515を確認した。弥生時代中期のもので、SH 8との関係が注目される。

SH 9は、隅丸方形竪穴住居址で調査区北西隅にある。SH 8より時期は新しいが、周溝の深さが極めて浅く、残存状況は悪い。周溝は幅0.15~0.25m、深さ約0.03~0.05mを測る。建物南東側の一部を確認した。柱穴、床面の整地土も確認できていない。この他、多数の柱穴群を検出した。埋土は2.5Y3/2黒褐色、2.5Y4/2暗灰黄色、5Y4/4オリーブ褐色等の泥砂である。

#### 第3トレンチ

SH 1は長軸約4.5m、短軸約4.0mの隅丸方形竪穴住居址で調査区東側中央にある。北東部の周溝がやや深い程度で残存状況は悪い。周溝は幅0.1~0.2m、深さ0.1~0.2mを測る。東角以外を確認したが、柱穴、床面は確認できていない。北・西角部分に円形状の土壇が存在し、古墳時代の遺物が出土した。また、南東の周溝部分に弥生末から古墳の壺等を破棄した土壇が2基（SK315・781）存在する。これらの土壇と住居址の間には何らかの関係性が考えられる。

SH 2は隅丸方形竪穴住居址で調査区北中央にある。南角部分を確認した。周溝は幅0.15~0.2m、深さ約0.1mを測る。2基の土壇が存在するため柱穴・床面は確認できていない。

SK325は浅い不整形な土壇で調査区北中央にある。長軸約1.25m、短軸約1.0m、深さ約0.2mを測る。焼土が破棄された土壇でSD350に切られる。但し、焼土がSD350に流れ込む状態が確認できたことから、当初はSD350と同時併存したと考えられる。

SD350は、ほぼ中央に位置し、調査区をななめに縦断する溝である。幅約4.0m、深さ1.2m、断面は逆台形を呈し、溝底の幅は約2.0mでほぼ平らである。埋土は黒褐色泥砂で、砂などの水の流れた痕跡を示すものは確認できなかった。また、西肩部には地山とみられる黄褐色泥砂の流れ込みが確認できたことから、再掘削をおこなった可能性も考えられる。また、このSD350に接合する遺跡を西側で2条、東側で3条確認した。

### 3 遺 物

時代	遺構	遺 物	備 考
平安時代 以降	溝・木棺墓	三彩陶器片、土師器皿、瓦器羽釜脚部	
古墳時代	住居跡・柱穴・土壙	須恵器坏・蓋・擂鉢型土器、土師器壺・壺・高坏、石器勾玉・菅玉・白玉	
弥生時代 以前	住居址・柱穴・土壙・溝・環濠	弥生土器壺・壺・短頸壺・高坏・椀、石器石錐・尖頭器・石庖丁・石斧・石錐・石劍・石棒・敲石・槌文土器片	

#### 出土遺物の概要：

出土した遺物はコンテナに102箱である。平安時代の遺物は極めて少量であり、古墳・弥生時代の遺物を中心確認した。

平安時代以降の遺物は、第1トレンチの南壁沿いから陰刻のある三彩陶器片が出土し、第3トレンチの中央部から瓦器羽釜の脚部が1点出土した。SK175では掘形北東隅から遺存状態の悪い板材に挟まれた状態で、土師器皿が5点出土した。この他、耕作溝などから土師器小片などが認められるにすぎない。平安時代以前の出土遺物のうち、古墳時代のものは土師器壺・壺・高坏・須恵器坏・勾玉模造品・菅玉・白玉が出土した。第1トレンチのSD27から多数の穿孔をもつ擂鉢形須恵器底部片が1点出土した。この他、勾玉模造品が第3トレンチSD350上層・豎穴式住居址SH 1、及び第1トレンチSD1008から各1点ずつ、SD350上層から白玉が1点あるほか、菅玉・白玉が5点出土した。

また、用途は不明だが断面八角形の柱状小石製品が第3トレンチSD144から出土した。SK781からは、弥生時代末期から古墳初頭のはば完形の壺が1点出土した。

弥生時代の遺物はSD350から出土した後期の遺物が大半をしめるが、土壙などからもまとまって、壺・壺・短頸壺・長頸壺・高坏・椀などが出土した。また、石庖丁・石錐・石錐・石斧・石劍・尖頭器や石棒・敲石・砥石なども多量で、とくに未製品、剥片なども多数認められることから、付近で石器製作に関わる工房の存在が想定される。

第6図は全て弥生土器で、1は第2トレンチ出土の器台、2は第3トレンチ土器溜まり出土の椀、3は第3トレンチ出土の広口壺、4は第3トレンチのSD350出土の広口壺、5は1tr SK1082の壺、6は第3トレンチSD350の高坏、7は第3トレンチ SD350の高坏、8は第3トレンチ土器溜まり出土の短頸壺、9はSX1010の高坏、10はSD350の壺、11は第1トレンチ SD27の擂鉢形土器。

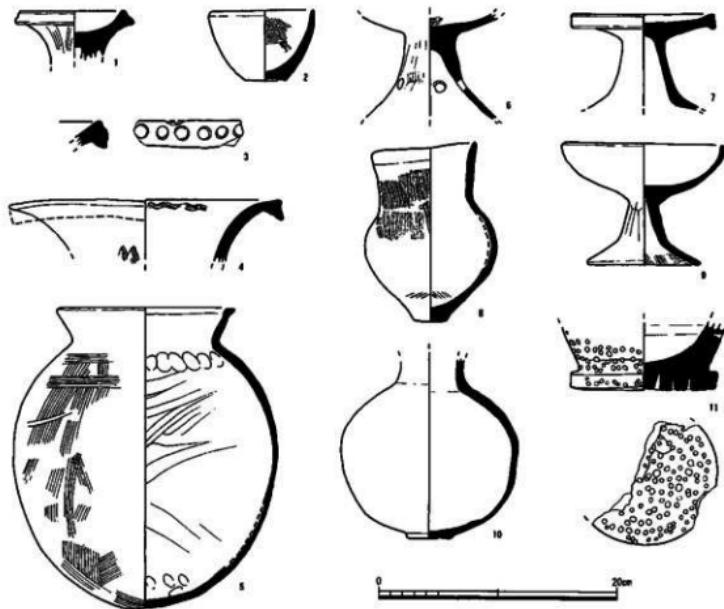
第7図は石斧頭で、12はSK1063出土の粘板岩製の扁平片刃石斧、13は第3トレンチ SD350の摩製石斧、14は第3トレンチ SD358の摩製石斧、15はSD1037の扁平摩製石斧、16は第1トレンチ SX1007の大型蛤刃摩製石斧、17は第3トレンチ精査中出土の摩製石斧、18は第1トレンチ SD24の摩製石斧。

第8図は石包丁で、19は第1トレンチ SH05出土、20は第1トレンチ掘り下げ中の出土、21は第3トレンチ SX742、22は第3トレンチ SK369、23は第3トレンチ SD141、24は第3トレンチ出土、25は第3トレンチ掘り下げ中出土、26は第1トレンチ SX1107の炭層出土、27はSH04、28は第3トレンチ SD122出土であるが穿孔があげられていない。

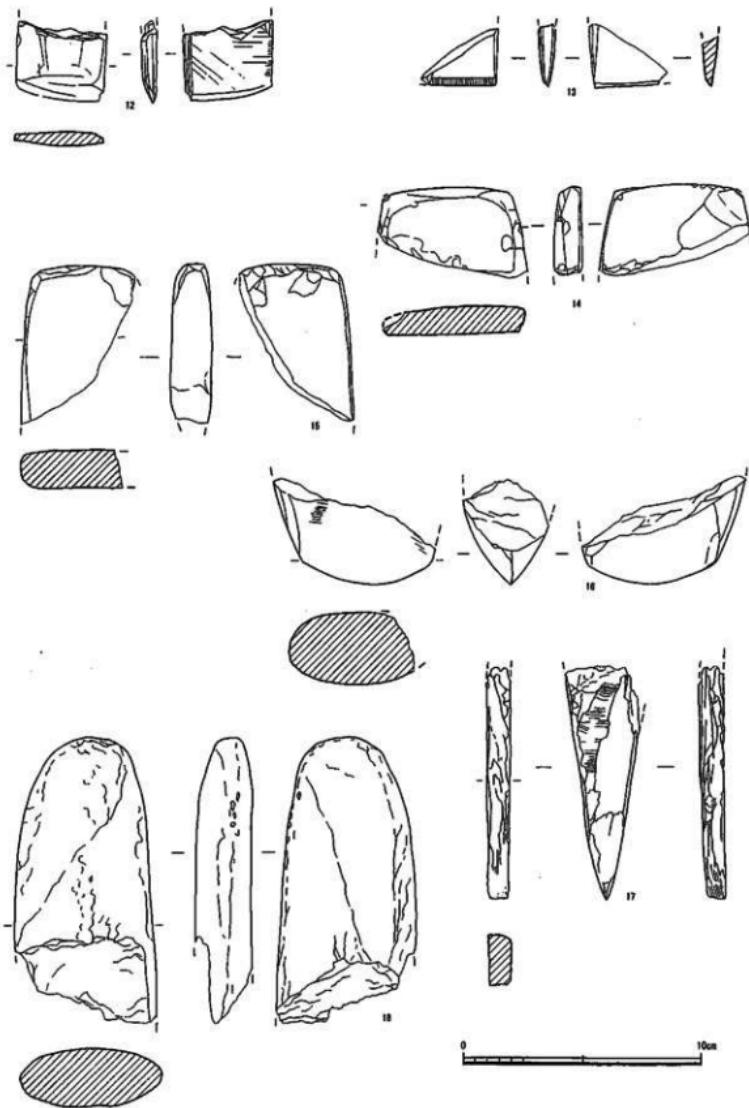
第9図 29はSD350出土の摩製無石斧、30は第1トレンチ SK1131の摩製石斧であるが、片面が磨滅しており、二次的に再利用したと見られる。31は第1トレンチ SH06出土の石棒。

第10図 32・33はSD350出土の摩製石錐、34は第3トレンチ SD350の摩製石劍、46は第1トレンチ SD1008

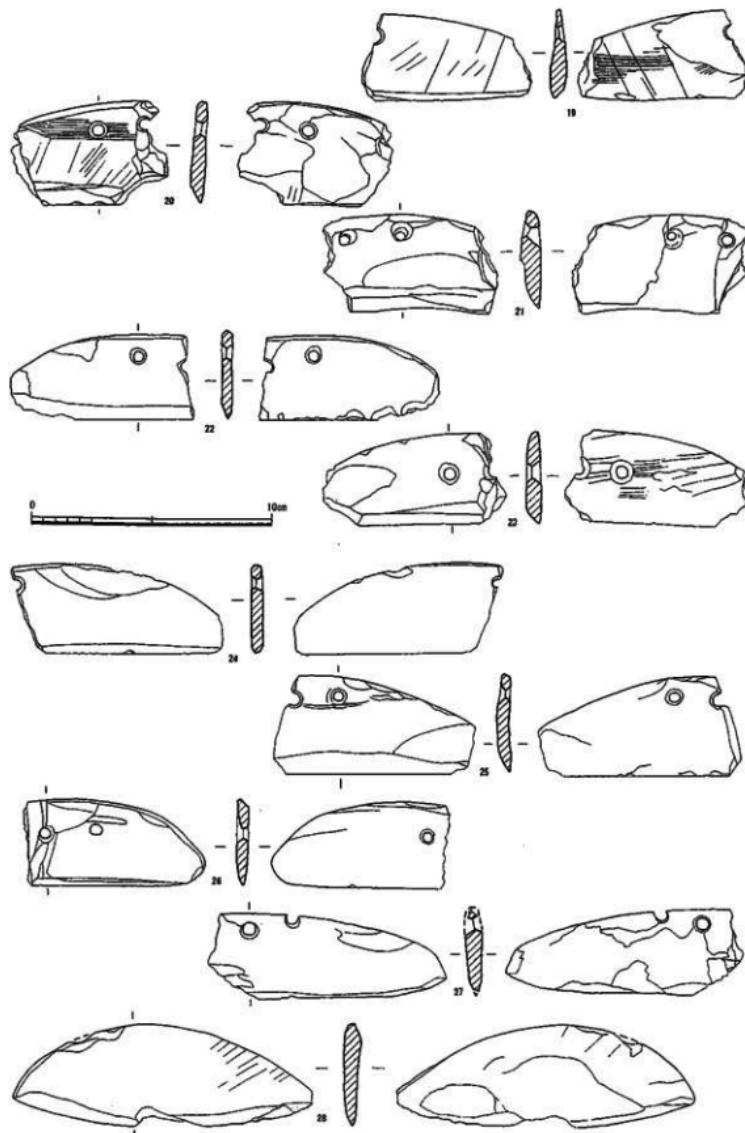
の摩製石劍、35は第1トレンチSD1008の石製勾玉、36は第3トレンチSD350の滑石製勾玉、37は第3トレンチSH01の石製勾玉。丁字頭勾玉の形態で片面には二ヶ所の穿孔があるが反対面には一つだけ貫通している。38は第1トレンチR12区出土の白玉、39は第3トレンチSD350の白玉、40は第3トレンチSD144の多角柱状石製品、41は第1トレンチ出土の扁平状石製品、42～45は管玉。41は表探、44は第1トレンチp1139、45は第1トレンチSK1037出土。



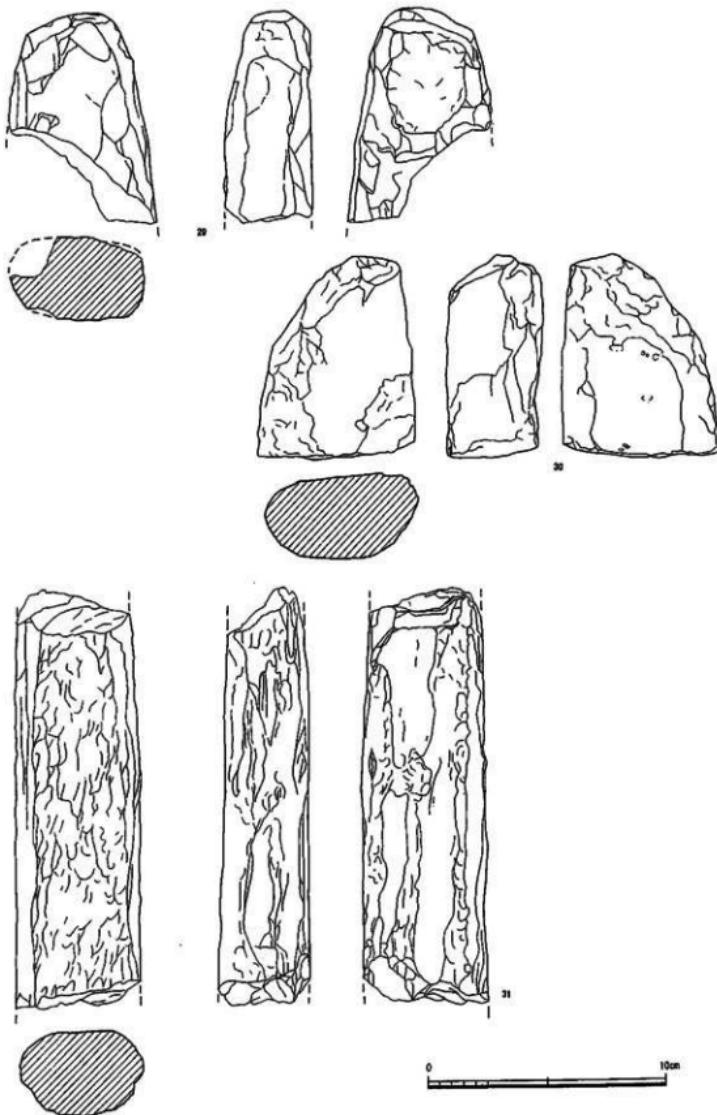
第6図 出土遺物 (1)



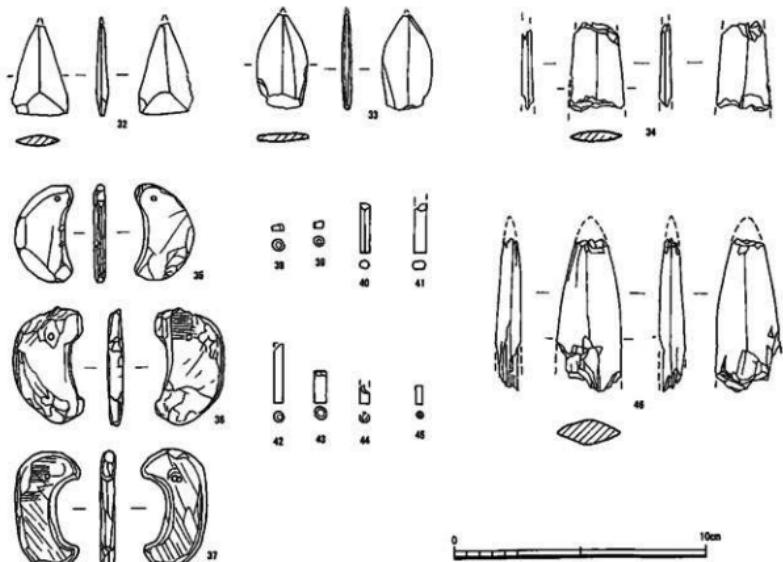
第7図 出土遺物 (2)



第8図 出土遺物 (3)



第9図 出土遺物 (4)



第10図 出土遺物 (5)

#### 4まとめ

今回の調査では、弥生から古墳時代にかけての遺構の変遷の一端が確認できた。円形竪穴住居を伴う環濠が弥生時代中期に作られた。その環濠は逆台形の断面を持つ深さ1.2m、幅4mのもので、埋没過程において一度掘り直しがなされている可能性も考えられる。また、古墳時代まで座地もしくは溝として環濠の名残をとどめていることも確認した。この環濠に伴う円形竪穴住居は3棟確認しており、いずれも環濠の南東側に存在する。そのことから、南東側が環濠の内側と推定される。この環濠には5条の箱形もしくは逆台形の溝が連結する。これらは環濠内外からの排水路、区画溝等の可能性が考えられる。また、このうち2条は環濠の外側にあると推定できることから、さらに外側にも集落に関連する施設が存在する可能性も考えられる。

この環濠が完全に埋没してしまうのは古墳時代になってからであることが出土した遺物から窺える。但し、環濠集落としての変遷については今後調査例が増加することによって確定するであろう。

# 図 版



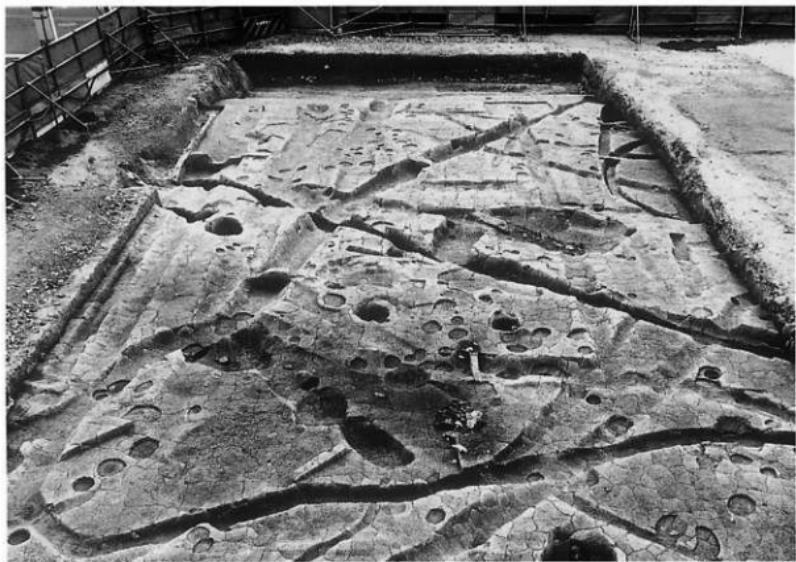
1 調査地周辺の航空写真（1987年撮影）



1 調査前風景（東から）



2 調査区全景（北から）



1 調査区第1トレンチ全景（北から）



2 調査区第2トレンチ近景（西から）

図版四



1 調査区第3トレンチ全景（真上から）



2 調査区第3トレンチ全景（北から）



1 SH2 (西から)



2 SD350断面 (南西から)



1 SK1160 遺物出土状況近景（北西から）



2 第1トレンチ P1127 出土状況（西南から）

## 報告書抄録

ふりがな	へいあんきょううきょうないごいせき							
書名	平安京右京内5遺跡							
副書名	平安京右京三条二坊十四町跡							
巻次								
シリーズ名	平安京跡研究調査報告							
シリーズ番号	第23報							
編著者名	江谷 寛							
編集機関	(財)古代学協会							
所在地	〒604-8131 京都府京都市中京区三条高倉				TEL 075-252-3000			
発行年月日	平成21年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所取遺蹟	所在地	市町村	遺蹟番号					
へいあんきょ ううきょうろ くじょうよん ぼうななちよ うあと	きょうとし きょうくさいい んげっそうちよ う	26100		34° 59' 35"	135° 43' 30"	2005年3 月1日～ 5月13日	700m <sup>2</sup>	建物建築 工事
平安京右京 六条四坊 七町跡	京都市右京区西 院月双町 119							
所取遺蹟名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京右京 六条四坊 七町跡	都城跡	弥生時代以前～  古墳時代	環濠、竪穴住居、土塙、溝	弥生壺・壺・短頸壺・ 高坏・掩・石器・石庵丁・ 石斧・石鎌・石劍・ 石劍・石棒・繩文土 器  須恵器坏・壺、土師 器壺・高坏、勾玉・ 管玉・白玉	三彩陶器・土師器皿、 瓦器羽釜脚部			
		平安時代以降	柱穴、溝、木棺墓					
		近世・近代	南北・東西小溝、土壤、 池状遺構、河川					

平安京右京七条二坊十一町跡  
西大路 マンション新築工事に伴う発掘調査

## 例　　言

- |         |                         |
|---------|-------------------------|
| 1 遺跡名   | 平安京跡（平安京右京七条二坊十一町）      |
| 2 調査所在地 | 京都市下京区西七条比輪田町37番地       |
| 3 委託者   | 株式会社 大林組                |
| 4 調査期間  | 平成16年（2004）10月22日～12月3日 |
| 5 調査面積  | 約320m <sup>2</sup>      |
| 6 契約番号  | 略記号：04HK-U6             |
| 7 調査担当者 | 堀内明博                    |
| 8 実勤日数  | 32日                     |
| 9 延べ人数  | 補助員 64人　作業員 180人        |

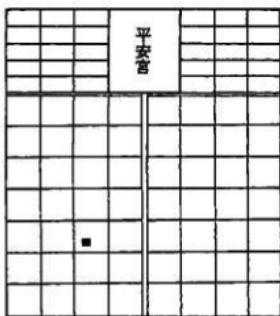
## 1 調査概要

### 1 調査概要

本調査は、京都市下京区西七条比輪田町37番に所在するマンション新築工事に伴う発掘調査である。調査地は、京都の市街地の南西、西大路七条交差点の北東に位置する。現況の標高は約21.7mである。当地は平安京の右京、七条坊門小路の南、野寺小路と西堀川小路の間に位置し、条坊では七条二坊十一町の南東にあり、その東一行～東二行北六門に相当する。また、十一町は官設の市場である西市西側の外町にあたる。これまでの調査事例は、十一町において5例の試掘、立会の事例があり、平安時代の遺物包含層、流路、湿地堆積が確認されている。また、この南の十二町では、1978年に実施された調査で平安時代前期の構、柱穴、土壌、井戸などが確認され、井戸内からは木簡とともに多量の皇朝錢が出土し注目を集めた。また、同町での1997年度の調査では、確認された建物、井戸などの遺構配置から、平安京域での一般的な宅地の町割りとは大きく様相が異なり、市との関係をうかがわせる成果が報告されている。なお、当地は弥生時代～古墳時代の遺物散布地である衣田町遺跡の範囲内にあたる。

このような事例から、西市に関連するものや平安時代以前の遺構、遺物の存在が予想された。

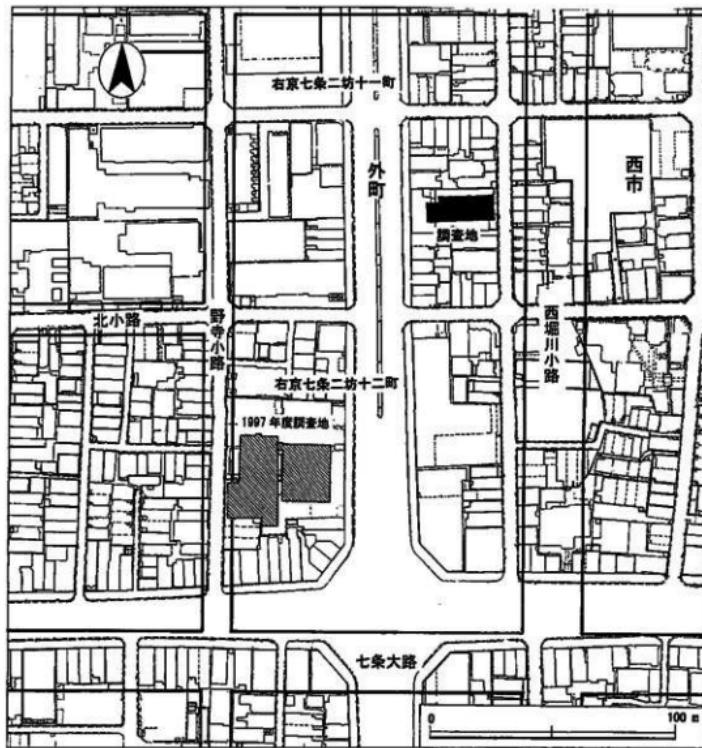
調査の結果、平安時代を中心に繩文時代から近代にかけての遺構、遺物を確認した。



第1図 平安京条坊の調査地点

### 2 特記事項

調査の結果、平安時代後期以降の土取り跡とみられる比較的大きな土壌が調査区の東端で確認された。深さは、深い所で0.6m近くを測り、それ以前の遺構はこれにより多くが破壊されていると考えられる。これらの分布状況をみると、調査区の東半部に土取り穴が広がり、部分的に近世の耕作溝が検出された。平安時代の可能性を考えられる遺構としては、とくに調査区東半に集中して建物柱穴、土壠を数基確認した。遺物が細片のため詳細な時期を確定しがたいが、西市に関係する遺構と考えられ重要な成果といえる。また、調査区全域は、平安時代以前と考えられる北東から南西方向の旧河川上に位置し、砂礫を主体とした堆積土の状況から急な流れが複数時期あったものと考えられ、沖積地での低地における小規模河川の存在が明らかとなった。また、調査区からはサヌカイトの剥片などが出土し、河川との関連が注目される。



第2図 調査位置図



第3図 平安京の調査地

## 2 遺構

遺構総数 140 基

時代	遺構	備考
近世・近代	南北・東西小溝、土壙	
平安時代前期以降	柱穴、土壙、溝、土取り穴	
平安時代以前	流路	

### 遺構の概要

本調査により確認された遺構総数は140基を数え、平安時代から近代まで至る。これらは継続するものではなく、平安時代以前、平安時代、近世・近代の3時期に大別され、それぞれ性格の異なる遺構であることが判明した。以下に主要な遺構について概観する。

調査地の基本土層は、現地表面下約30～40cmが近現代の盛土で、次いでその下5～10cmが中世から近世にかけての耕作土層（a：2.5Y4/2暗灰黄色泥砂、b：2.5Y3/1黒褐色灰色泥砂）である。この層は、近現代の盛土により調査区の西半では部分的に確認したにすぎない。その下に地山（7.5YR6/3にぶい褐色泥砂）が存在する。地山と考えられる泥砂質のものは、東半部のみ確認され、西半は旧河川の堆積土である砂礫層上に平安時代以降の遺構が存在する。

### 1 平安時代から近世

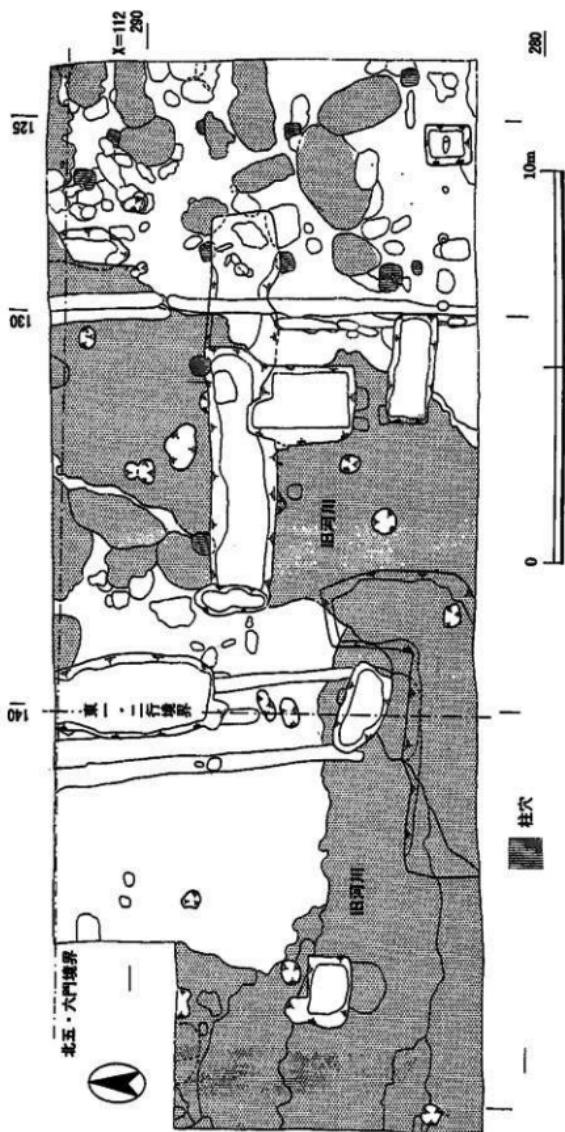
調査区の中央付近で南北方向の並走する溝を3条確認した。溝の規模はいずれも、幅30～40cm、深さ約15cmをはかり、方位は北で西に度数傾く。これらの溝のうち1条は、四行八門制の東一行と二行の境界と一致する。東半では、平安時代後期以降の土取り穴を多数検出した。土取り層の埋土は褐色砂泥10YR4/1・2.5Y4/1、明黄褐色砂泥10YR7/6、明黄褐色泥土10YR6/6等である。

土取り穴は方形に掘り下げたものが多数検出されたが、その周囲には小規模な土壤状の遺構が確認された。土取り穴の規模は、一辻0.5～3m、深さは20～90cmを測る。

また、トレンチ東端から西へ6mの所で、南北に走る溝（灰黄褐色砂泥 10YR4/2）を2条検出した。溝の幅は15～30cm、深さ5～10cmを測る。それらの溝は正方位のものである。また、東半部では柱穴が数基確認されたが、調査区の制約から建物の全容は確定できない。

### 2 平安時代以前

調査区の主に西半では、東北から南西方向にかけての複数時期にわたる旧河川の堆積土と考えられる砂礫層が確認された。この層中からは明確な遺物が確認できなかったため、調査区南西隅部の旧河川堆積層中の腐植土層について、AMS法により年代測定を行う予定であり、その結果をふまえて詳細な検討を行いたい。



第4圖 遺構図

### 3 遺 物

時代	出土地	遺 物	備 考
近世～近代	耕作溝、土壤	焼締陶器小片、瓦器鍋小片	
平安時代後期以降	柱穴、土取り穴、溝、土壤	土師器小片（皿・碗・壺）、須恵器（杯、盃、甕）、灰釉陶器小片（碗・盃）、綠釉陶器小片、黒色土器小片、瓦器小片、平瓦小片	
平安時代以前	包含層	剥片（サスカイト）	

出土遺物の概要：出土した遺物は、コンテナーに6箱である。

主に、調査区の東半に分布する土取り穴からの出土である。土取り孔の埋土からは、平安時代後期から鎌倉時代の遺物が出土した。また、サスカイトの剥片がこれらの遺物とともに出土したが混入したものと考えられる。

### 4 まとめ

平安時代の西市に関連する遺構として、わずかであるが柱穴などを確認した。西市外町の状況を知る上で重要な手がかりを得ることができた。これらは後世の削平を受けているにもかかわらず、かろうじて残存しており、しかも遺構の状態が希薄であることからあまり建て替えがおこなわれていなかつたことが推察できる。それは出土遺物量の多少に反映されていることからもうかがえる。外町の実態解明には至らなかったが、そのあり方の一端を知ることができた。また、近世の遺構として南北溝があるが、そのうち調査区の中央付近で確認されたものは、四行八門制の東一行と二行の境界に位置することから、平安京の条坊割付が近世まで引き継ぎ継承されていたことをうかがわせるものである。

このような成果から、西市の実態およびその歴史的変遷を知る重要な資料がえられた。

# 図 版



1 調査前風景（西から）



2 調査地全景（東から）

図版  
二

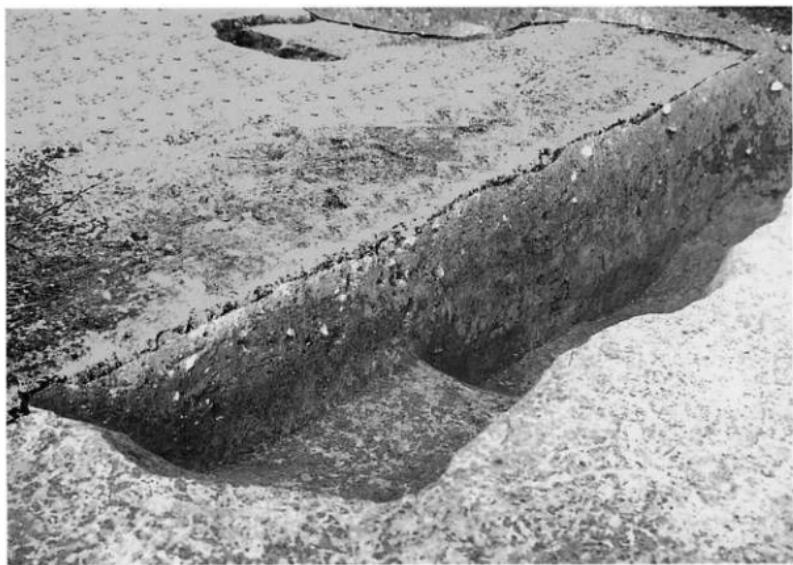
1 調査区全景（西から）



2 調査区前掲（真上 南から）



1 調査区東端（真上 北から）



2 SK70（南西から）

## 報告書抄録

ふりがな	へいあんきょううきょうないごいせき						
書名	平安京右京内5遺跡						
調査名	平安京右京三条二坊十四町跡						
卷次							
シリーズ名	平安京跡研究調査報告						
シリーズ番号	第23報						
編著者名	江谷 寛						
編集機関	(財)古代学協会						
所在地	〒604-8131 京都府京都市中京区三条高倉 TEL 075-252-3000						
発行年月日	平成21年3月31日						
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 .	東経 .	調査期間	調査面積	調査原因
へいあんきょ ううきょうし ちじょうにほ うじゅういつ ちょうあと 平安京右京 七条二坊 十一町跡	きょうとししも ぎょくうにしし ちじょうひわだ ちょう 京都市下京区西 七条比輪田町 37	26100	34° 59' 15"	135° 43' 30"	2004年 10月22 日~12 月3日	320m <sup>2</sup>	建物建築 工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
平安京右京 七条二坊 十一町跡	都城跡	平安時代以前	流路	削片(サスカイト)			
		平安時代	柱穴、土槽、溝、土取り穴	土師器(皿・椀・甕)、 須恵器(杯・盞・甕)、 灰陶器、綠釉陶器、 黑色土器、瓦器、平 瓦			
		近世・近代	南北・東西小溝、土塙	焼緋陶器、瓦器鍋			

---

## 平安京跡研究調査報告 第23輯

発行日 平成21年3月31日  
編集行 財團法人 古代學協會  
604-8183 京都市中京区三条高倉  
振替 01080-4-850  
TEL 075-252-3000

印刷 傑吉川印刷工業所  
601-8353 京都市南区吉祥院道登  
中町45-1  
TEL 075-691-8186

---

PALAEONTOLOGICAL STUDIES  
IN THE CAPITAL HEIAN, VOL. XXIII

EXCAVATIONS OF FIVE SITES  
IN THE PARS OCCIDENTALIS OF THE  
CAPITAL HEIAN

THE PALAEONTOLOGICAL ASSOCIATION OF JAPAN, INC.

KYOTO, MMIX